本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、学校法人西野学園が実施した令和7年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

文部科学省委託事業

令和７年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発･実証

地域活性化のための農福連携人材育成事業

成果報告書

令和８年３月

学校法人西野学園

札幌心療福祉専門学校

目次

第 1 章　事業の概要
　第 1 節　　事業名
　第 2 節　　事業の概要
　第 3 節　　事業の実施期間
　第 4 節　　事業の推進体制

第 2 章　実施概要
　第 1 節　　実施経緯
　第 2 節　　実施体制図
　第 3 節　　会議議事録
　　第 1 項　　コンソーシアム会議
　　第 2 項　　カリキュラム会議

第 3 章　今年度の事業及び教育プログラムの内容
　第 1 節　　北海道余市紅志高等学校との連携（令和7年度）
　　第 1 項　　連携内容
　　第 2 項　　成果
　第 2 節　　札幌圏域の高等学校等との連携（令和7年度）
　　第 1 項　　連携内容
　　第 2 項　　成果
　第3節　　教育プログラムの開発
　　第 1 項　　実証講座の内容
　　第 2 項　　オランダ視察
　　第 3 項　　成果

第 4 章　全体の振り返り（時系列に記載）
　会議（ヒアリングなど）

第 5 章　　まとめ

第１章　事業の概要

第1節　事業名

令和7年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証
「地域活性化のための農福連携人材育成事業」

第２節　事業の概要

・名称

『地域活性化のための農福連携人材育成事業』

・内容

(1)開発する高・専一貫の教育プログラムの全体像

社会福祉士と精神保健福祉士の養成校である本校では、近年多くの地方自治体で取り組みが進んでいる「農福連携事業」を学ぶことで障がい者や高齢者に対して、農業の知識を身に付けたソーシャルワーカーが相談業務を行うとともに農業作業のアドバイスをすることができる人材を育成することを目指している。その目的を達成するために、高校生の段階から、ソーシャルスキルや社会人基礎力を養い、福祉の基礎的な知識や考え方に少しずつ触れながら、専門学校へ進学後に現場での実習経験を積み、社会福祉主事や社会福祉士の資格取得を余裕のあるカリキュラムで目指す教育プログラムを構築する。この高専一貫プログラムで、進学後のミスマッチを避け、中途で退学する学生の減少にもつなげ、農福連携に取り組む地方自治体に就労することにより、若者の地域への定着と地域の活性化を図ることを目的にしている。

(2)新たな教育プログラムを開発する理由

新たな教育プログラムを開発する背景としては、以下の点が挙げられる。

①学習習慣を身に付ける環境がなかった学生がいる。
②それまでの学校生活が合わず、いわゆる「不登校経験」を持つ学生がいる。
③「社会的貢献ができる仕事に就きたい」という気持ちが強い。
④精神疾患や発達障害の診断を受けている学生がいる。
⑤他者とのコミュニケーション等に悩み、卒業後、国家試験受験に必要な実務経験１年を積むのに苦労する学生がいる。
⑥遠方からの入学者の内、地元に戻って就労する学生が少ない。
⑦専門学校が地域社会に関わる機会がこれまでの実践では少なかった。
⑧特別支援学校高等部を卒業した生徒の進学先が求められている。

様々な背景を持つ学生に対し、専任教員は教員自身のソーシャルワーカーという専門性を生かし、学生が卒業し就労していけるよう努力している。しかし、専門学校３年間だけで対応することは学生にとっても負担になっており、中途退学者や資格取得できない者もおり、現時点でも各学年２名ほどの休学者が存在している。これらの課題解決のためには、高等学校・特別支援学校・行政・企業の連携協力が必要である。

(3)開発する教育プログラムがどのような点で課題を解決することが可能であるのか。

上記のこれまでの教育内容では対応できない課題を次の 3 つに分類することができる。

A:地域活性化に取り組む高校との連携(①、②、③、⑥、⑦)

・農業実習を行う連携農園がある余市町唯一の公立高校と連携する。
〔北海道余市紅志高等学校(全日制総合学科)〕〔北海道余市養護学校〕

・地元の余市町にもコンソーシアムに参加していただき、高専民公で地域活性化を目指す教育課程と企画を実行していく。

B:不登校・発達障がいに積極的に取り組んでいる高校との連携(①、②、③、④、⑤)

・本校に進学実績があり、農福連携ソーシャルワークコースへの入学希望者がいる。
〔市立札幌大通高等学校(定時制・午前午後夜の 3 部制)〕

・通級指導教室がある札幌市唯一の高校における専門学校教員による早期からの授業参加

C:高等支援学校との連携(①、②、③、④、⑤、⑧)

・高等支援学校には、発達に偏りがあるものの知的には高い生徒も在籍している。
〔北海道札幌あいの里高等支援学校 〕

これらの学校と高専一貫カリキュラムで連携することで、早い段階から SST(ソーシャルスキルトレーニング)や社会人基礎力の育成ができ、高専 6 年間または 7 年間の一貫教育で持続可能な社会に貢献する人材を育てることができる。

第 3 節　事業の実施期間

令和 7 年 5 月 28 日から令和 8 年 3 月 1 日まで

第 4 節　事業の推進体制

本事業の推進体制につきまして、四者によるコンソーシアムの構築と高等学校の連携協力校、行政機関の支援協力、企業の連携協力を含め 16 箇所との推進体制を整えた。

構成機関及び構成員

(1) 高等学校

	名称	役割等	都道府県名
1	北海道余市紅志高等学校	コンソーシアム参加	北海道
2	市立札幌大通高等学校	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道余市養護学校	連携協力校	北海道
4	市立札幌豊明高等支援学校	連携協力校	北海道
5	市立札幌みなみの杜高等支援学校	連携協力校	北海道
6	北海道札幌あいの里高等支援学校	連携協力校	北海道

(2) 行政機関

	名称	役割等	都道府県名
1	北海道余市町	コンソーシアム参加	北海道
2	北海道教育庁高校教育課	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道総務部学事課	支援協力	北海道
4	北海道農政部農業経営課	支援協力	北海道

(3) 専門学校

	名称	役割等	都道府県名
1	学校法人西野学園　札幌心療福祉専門学校	コンソーシアム参加 プロジェクト代表校	北海道

(4) 企業

	名称	役割等	都道府県名
1	特定非営利活動法人どりーむ・わーくす （就労継続支援B型事業所/水尻農園）	コンソーシアム参加	北海道
2	株式会社ネクストリソース	コンソーシアム参加	北海道
3	株式会社 dispo.（就労継続支援 B 型事業所）	コンソーシアム参加	北海道
4	カゴメ株式会社 東京本社	コンソーシアム参加	東京都
5	竹内農園	連携協力	北海道
6	吉岡農園	連携協力	北海道

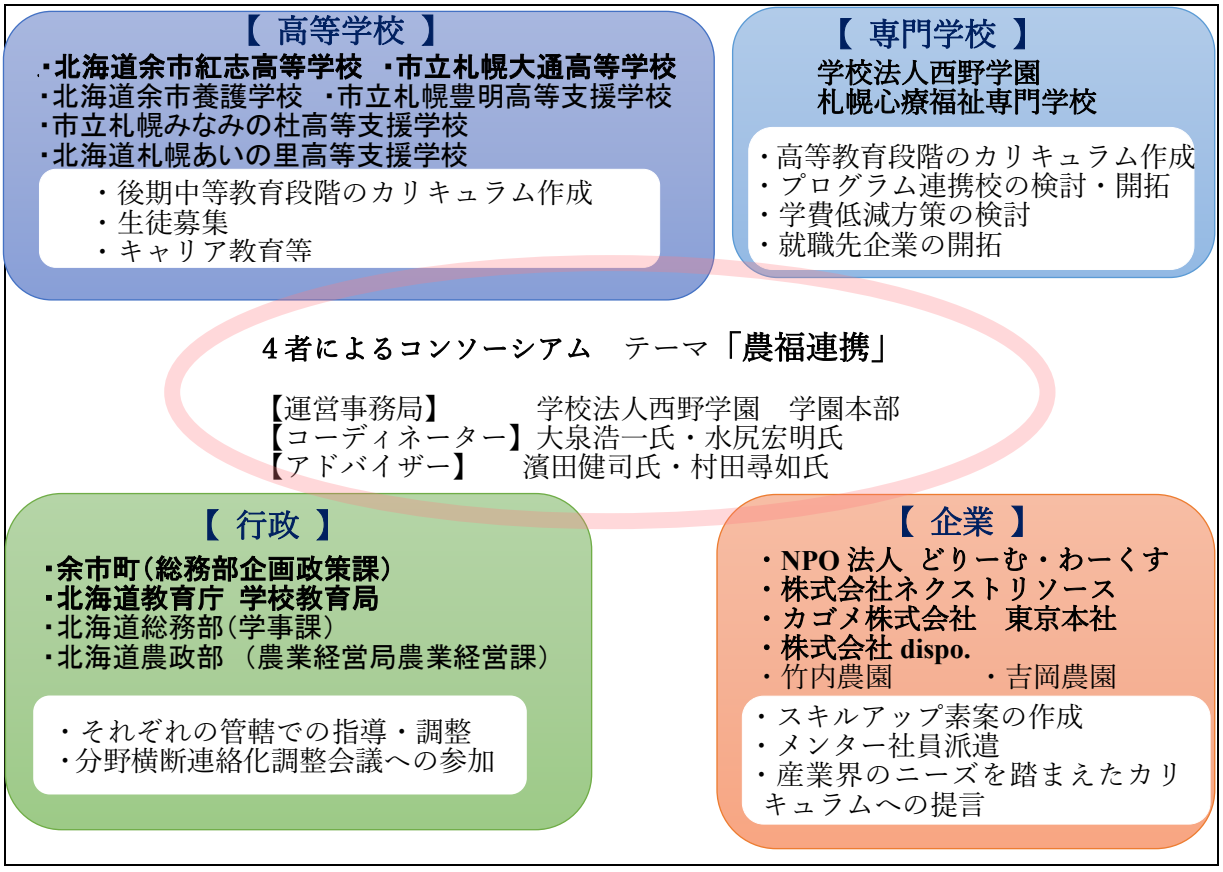
第２章　実施概要

第１節　実施経緯

・本事業では、令和7年5月～令和8年2月までに「コンソーシアム会議」「カリキュラム会議」を含む、関係機関との会議及び打ち合わせを行い、当該事業の目標達成のための体制整備や、具体的なプログラム開発を行った。

・「就業人口減少・高齢化」という課題を抱える農業界と、障がい者や高齢者の社会貢献の場の創出という課題を抱える福祉業界が連携することで、両業界の課題を解決するとともに、そのことによって地域の活性化を目指す取り組みである「農福連携」が国や各地方自治体等によって推進されているが、両業界が互いのことを知らないことで両者のマッチングが難しい現状にある。そのことから両業界の橋渡しができるコーディネーターの役割を担える人材の育成が求められており、福祉専門職養成校の立場から、「農福連携の知識や技術を持った」福祉専門職の育成を目指すための体制づくり、カリキュラム開発を行った。来年度以降も、より多くの農業関連団体や福祉関連団体、行政等を協力機関として迎え、より実効性の高いカリキュラム開発を行っていく予定。

第２節　実施体制図



第 3 節　会議議事録

第1項　コンソーシアム会議

第 1 回コンソーシアム会議　議事録

日　時:令和7年7月 28日(月)14:00～15:30

場　所:学校法人西野学園　札幌医学技術福祉歯科専門学校　2Fコミュニティルーム

司会進行:　長井豊貴(学校法人西野学園)

出席者:対面 15 名、web3 名、計 18 名(詳細別紙)

1.理事長あいさつ

前鼻英蔵(学校法人西野学園)

2.令和 7 年度の活動予定

(1)連携授業

1)余市紅志高校との連携

佐藤誉匡(精神保健福祉科)

2)札幌圏域高校等との連携

幡　　直人(精神保健福祉科)

(2)農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラム

1)農福連携の実際Ⅱ

飯島英幸(精神保健福祉科)

(3)2025 年度　花フェスタ　参加

酒井　啓　(精神保健福祉科)

上記、(1)(2)(3)について別紙資料①②③④を基に各担当者より説明がなされた.

▹村田氏(アドバイザー)より

≪余市紅志高校との連携について≫

・芽かき作業も共同して行うか

→今年度は播種～芽かき～収穫までを共同で行う。

・多種学校の共同で行うときの苦労はないか

→養護学校との連携は今年で2年目を迎え、昨年1年目に試行錯誤して行った結果が効果を生んだ。今年度は、重複障害の生徒が3名いるため、環境に配慮し校内でバリアフリー化された環境(模擬的なバリアフリー農園)を整え実施した。

≪札幌圏域高校との連携について≫

・成果が社会人や学生など多方面にわたる内容であるため、ぜひアンケートを取るなどして効果検証の分析を進めてほしい。

≪農福連携の実際Ⅱについて≫

・本事業の成果の一つとして認知している。手順書作成に苦労はないか。また、作成した手順書を基に実際に専門学校生が用語支援高校生をコーディネートするような機会があればと思うがいかがか

→現行の 3 年生が 2 年次から取り組んでいて慣れてきた部分がある。また同時期に並行して実際に施設実習が行われていて、その中での経験に上乗せできていると感じる。その意味では多方面への波及効果を含め検討していきたい。

≪花フェスタ参加について≫

・このように外に向かうと西野学園の卒業生などの反応も得られ、大変有用と思う。特に農福とのことから屋外で行う活動はとても有意義であり、この事業の成果と感じる。

3.参加団体から(敬称略)

…コンソーシアム会議参加団体から

▹前田氏(市立札幌大通高等学校)

本校生徒の特性から考えると社会人や専門学生としっかりコミュニケーションをとれているのは、対応してくれている先生方のおかげと思い、感謝している。前年からのリピート参加生徒を見ていると毎回新たな気付きが得られ、直近では水尻さんに質問できるなどの変化がみられている。

学内でポスター(リーフ)をみて、親がぜひうちの子を参加させたいと申し込んだ生徒については当初教員の立場から心配していたケースも、受講後の生徒の表情や感想から良い変化(効果)として確認できた。

▷三上氏（(株)dispo.）

当事業所では今年度貴校から3名の実習生を受け入れた。他コースの実習生と比べ、対象者とコミュニケーションに時間を要することがなかった。表向きは控えめで積極性が乏しいように見えていても、対象者との距離感のとり方や言葉がけするタイミング非常に優れ、手順書の作成でも長けていた。1年次から演習系の授業に取り組んできた成果として捉えることができた。別件、「不登校の子を持つ親の会」に関わってきた側から述べると、今の引きこもりは家の中で元気に引きこもっていて、その子たちのニーズは「大人と本気で遊びたい」とか「本気で議論したい」などの声があり、社会人を含めた貴校の活動がとても参考になった。

…コーディネーターから

▷水尻氏（コーディネーター）

今春の農福連携授業から社会人が多くなってきて、議論も深まり、発表もうまくまとめられるようにって来たと感じる。その中、この事業が目指すところは今後どのようになるのかを改めて考えている。その意味では、このままこの事業を終了させてしまうのはもったいなく、なんとか道（農政部）の事業として継続できないかを提案する。他県（静岡/三重）では農福連携技術者研修の前段階のサポーター研修の実施などの前例がある。農福連携に関わる人材育成の一環として是非実施してほしい。

▷大泉氏（コーディネーター）

水尻氏より提案していただいた事業継続について道の協力が得られる方向性をもって良い議論となるようにしていきたい。

札幌圏域での連携授業では移動中のバス内でQuiz 形式講話してもらうなどの配慮してもらった。大人にも興味を持ってもらうため昨今の「コメ問題」「ホタテの問題」などを題材に流通部分で解説してもらった。別件、JA カレッジの講義を担当しているが、その経験から障がい者体験（アイマスクを使用した）を取り入れ、どんな気遣いが必要かを体験するなどの学習は効果的だったため取り入れたい。

農福連携の実際Ⅱでは、「（仮想）心福農園」を設置して実体験に近い状況を設定し学習してもらった。また日程が合わないとか金額面が合わない等のコーディネート業務の難しさを知る手立てとして（複数回のコ-ディネートを要する）難事例についても経験させたい。

……カリキュラム会議参加団体からの意見

▷宮岸氏（余市養護学校）

余市高校との連携では、重複障がいの子達には高校生に来てもらって実施したり、「役に立つ」よりも「してもらう」ことが多い中、「役に立つ経験が出来ること」が非常に良い経験となった。また教員にとっても「知的障害について」を高校生に教えるなどの経験は良い勉強となった。子どもたちがいろいろな人の役に立つことの経験を継続させたい。

道農政部と道教委との連携事業として近隣の果樹園を利用した農作業活動を行っている。当校生徒が農業をとおして働くことの学びを継続させたい

▷今井氏（あいの里高等支援学校）

今年度、本校の生徒が直接的に参加することは無いが、今後の活動の中で協力できることがあれば積極的に関わりたい。

今年度事業でも様々な取り組み、新たな取り組みがなされること理解した。本校で協力できることがあれば参加協力していく。

…協力機関からの意見

▷高谷氏（北海道農政部農業経営局）

ご意見の農政部事業として引き継げないかについては即答できないが、持ち帰り検討したい。

社会人の参加が増えて 20 名ほどに達していることから認知が広がってきていると感じた。

一方、アンケート結果を見ると認知度は不足していた。リーフ作成やガイドブック作成など発出しているが繰り返し発信していかなければならない。技術支援者の派遣事業を展開していくなかで発信し農福連携の認知度を高めたい。

4.アドバイザーより
　村田氏より前段において発言あり割愛

5.校長あいさつ
　これまでの連携事業における学習内容の見直しや継続内容としてもっと深化させる連携内容などの検討を再度行い、効果的な実践を進めていきたい。最終的には、農福連携を通して、「社会への接続」をスムーズにできるように学習プログラムの開発などを進めたい。
　今後も引き続き、委員の皆様からご指導をよろしくお願いしたい。

次回予定について
　今年度の事業報告として１月/中旬～２月/上旬に開催予定。あらためて事務局よりご連絡申し上げる。

～終了

参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	リモート参加
〃	株式会社ネクストリソース	大泉　浩一	
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上　智史	
〃（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）	学校法人西野学園　顧問	村田　尋如	
カリキュラム会議	市立札幌大通高等学校	前田　有美子	
協力機関	北海道農政部農業経営局	高谷　泰範	
〃	〃	品田　憲人	
〃	北海道札幌あいの里高等支援学校	今井　章文	リモート参加
〃	北海道余市養護学校	宮岸　尚平	リモート参加
事業代表者	学校法人西野学園	前鼻　英蔵	理事長
事業責任者	〃	鎌田　一宏	校長
事業担当者	〃	佐藤、飯島、幡、酒井	教員（4）
事務担当者	〃	市川、万行、長井	事務局（3）

第2回コンソーシアム会議　議事録

日　時:令和8年 1 月26日(月)13:30～15:00
場　所:学校法人西野学園　札幌医学技術福祉歯科専門学校　2Fコミュニティルーム
司会進行:長井豊貴(学校法人西野学園)
出席者:対面 10 名、web5 名、計 15 名(詳細別紙)

1.理事長あいさつ
前鼻英蔵(学校法人西野学園)
次年度は本事業の完成年度(終了年度)を迎える。これまでの結果を踏まえ、次年度にどのような仕組み作りを展開できるかを考えたい。
また、本科は入学希望者の減少に伴い、R8 年度入学生より募集停止し、閉校することとなった。本事業で得ることができた成果を今後どのように有効的に転嫁するかを考えたい。

2.令和 7 年度の活動報告
(1)連携授業
1)余市紅志高校との連携
佐藤誉匡(精神保健福祉科)
2)札幌圏域高校等との連携
佐藤誉匡(精神保健福祉科)
(2)農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラム
1)農福連携の実際Ⅱ、オランダ視察
飯島英幸(精神保健福祉科)
2)農福連携を支えるプロフェッショナルたち
酒井　啓　(精神保健福祉科)

上記、(1)(2)について別紙資料①②③④を基に各担当者より説明がなされた.

3.参加団体から(敬称略)
…コンソーシアム会議参加団体から
▹前田氏(市立札幌大通高等学校)
この連携授業通して今年度卒業見込みの4年生の進学先としてスマート農業に興味を持ち情報大学への進学やこれまで医療・福祉にまったく興味がなかった生徒が社会福祉士や臨床心理士を目指し北海道医療大や札幌学院大学へ進学するなどの良い機会となった。
教員としては1回ごとの授業で振り返り、そしてまとめ、発表するなど大人と共同しながら成果を共有する学びは大変良い機会となった。
希望として精神保健福祉士の通信課程が設けられると社会的にはとても有益な事ではないかと考える。道内にはその教育課程が無く、非常に残念である。ぜひ西野学園で運営していただきたい。
また、高校生のすそ野を広げるためにはオータムフェアなどで農業高校生が販売実習などをしているので、それらと福祉分野をコラボレーションするなどの取り組みも良いと考える。

▹西村氏(余市紅志高等学校)
この事業に参加することで余市養護学校と連携協力する良い機会となった。また、連携授業では西野学園の講師が授業を教授することで生徒のみならず高校教員にも良い学習機会となった。R9年度以降についても連携の仕方を一緒に検討していきたい。

…コーディネーターから
▹水尻氏(コーディネーター)
R8年度はこれまでの成果をまとめる1年間となる連携授業で学んだ生徒が福祉や農業に興味を持ち進路先となった、あるいは連携授業を受けた社会人が農福連携技術支援者として活躍するなど、これまでの取り組みによって何が主として実を結んだのか検証したい。

また近年、医療から農業に関わってきた人や特例子会社から農福連携に関わった人、または農福商工連携として関わっている人などとの接点が増えてきた。これまで農福連携の核は農業と福祉だったところに今後は社会人や企業が関わってくるだろうと考える。R8 年度の事業に盛り込んでいきたい。

……カリキュラム会議参加団体からの意見
▷宮岸氏（余市養護学校）
本校として貴重な授業となっている。本校の生徒にどのようにしたらうまく伝えられるのかなどを手順書に盛り込むなどの取り組みのおかげで本校の生徒自身に自信や成功体験をもたらしてくれた。また、肢体不自由の生徒には本校に来校して授業を展開するなどの様々な取り組みは共生社会に取り組んだものとなった。この授業がなくても余市紅志高校と連携できる方法を検討したい。
本校の生徒は障害が比較的重度で、「人の役に立つ」経験が少ないが、高校の生徒さんのために役立てたことは大きい。

▷今井氏（あいの里高等支援学校）
特別支援教育の理念の中に共生社会形成の基礎という形で謳われている。将来の社会形成者として障害のある方との共働を通して様々な経験が学びとして力となっていく。高校生は連携する中で心の中に内面化され後に言語化される良い機会となった。
今後成人となる人は特別支援教育を受けて育っていく世代で障害のある人も，ない人もともに支えあう意識を醸成していかなければならない。その意味でこの取り組みは大切である。

…協力機関からの意見
▷高谷氏（北海道農政部農業経営局）
福祉関連の方で農業が解らない人が農業をやるのは難しいと思うが、非常によく取り組んでいたことに感心した。
農福連携入門講座を8回実施した。2月に修了書を授与予定である。また、学生が農福連携のプロフェッショナルとしてインタビューに来てくれた。今後も現場で活躍することを期待して農福連携技術支援者を増やす活動を続けたい。

4.アドバイザーより
▷濱田氏（東海大学）
高校生・専門学校生・支援学級の生徒どうし、あるいは社会人と様々な人々との関わりあいと体験は素晴らしい事業と考える。農福連携にとどまらず社会との結びつきを感じた。
さらに卒業予定者3名のうち2名の学生が農福関連施設に内定等の効果が見える、とても良い事業プログラムである。
残念なところは、R8 年度生からは募集停止とのことでこれまでの成果を何か形として残してほしい例えば農林水産省推奨の（教育主導型）協議会設立プログラムの活用も視野に入れてはどうか。
また農福連携の教育モデルとして今回の事業は大きな成果を生んでいると捉えることができる。ぜひこれまでの取り組みを大きな成果として取りまとめ外部に発信できればと良いと思うし、してほしいと思う。

5.校長あいさつ
皆様からご指摘については、次年度の計画等に盛り込みながら、進めて参りたい。
余市紅志高校、余市高等養護学校の連携事業では、生徒・学生同士の交流の中から、他人を思う心やコミュニケーションを取ることの難しさなどから、本事業を通して、大きな変容があり、交流学習の成果があった。また、札幌圏域の農福連携講座では、異年齢の大人と生徒・学生の交流の中から毎回事業の終わりに発表の機会があり、その都度自分で考え、まとめ発表する訓練を行うことにより発表の内容が充実し大人から褒められることが多くあったことなどの成果があった。
また、オランダの視察を踏まえ、日本とオランダとの制度的な違いやケアファームの実態を見聞したことなどから、特にケアファームの規模による内

容の違いや異年齢による協働活動など様々な面において視察の効果があり、この経験等を活かしながら、新たな視点の農福連携の学習プログラムができればと考える。

　今後も引き続き、委員の皆様からご指導をよろしくお願いしたい。

次回予定について

　次年度の事業報告として6月に開催予定。あらためて事務局よりご連絡申し上げる。

～終了

参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	リモート参加
〃　アドバイザー	東海大学　文理融合学部経営学科	濱田　健司	リモート参加
カリキュラム会議	市立札幌大通高等学校	前田　有美子	
	余市紅志高等学校	西村　博幸	リモート参加
協力機関	北海道農政部農業経営局	高谷　泰範	
〃	北海道札幌あいの里高等支援学校	今井　章文	リモート参加
〃	北海道余市養護学校	宮岸　尚平	リモート参加
事業代表者	学校法人西野学園	前鼻　英蔵	理事長
事業責任者	札幌心療福祉専門学校	鎌田　一宏	校長
事業担当者	〃	佐藤、飯島、酒井	教員（3）
事務担当者	学校法人西野学園	市川、万行、長井	事　務　局（3）

第 2 項　カリキュラム会議

会 議 名	第1回　カリキュラム会議	
開催日時	令和7年10月10日（木）　14 時 00 分　～　15 時 30 分	
会　場	札幌心療福祉専門学校	
参 加 者	委　員	大泉　浩一（コーディネーター） 佐藤　誉匡（札幌心療福祉専門学校） 飯島　英幸（札幌心療福祉専門学校） 幡　直人（札幌心療福祉専門学校） 酒井　啓（札幌心療福祉専門学校）
		参加者　5 名
会 議 概 要	1　新カリキュラムについて オランダの農福連携の取組みの視察からこれまで余市紅志高等学校連携授業、札幌圏域連携授業で実施した内容が福祉と農業を結び付けることは利用者にとって良い効果があることと共生社会の実現につながることを確信した。 日本の施設内において農業を取り入れることは利用者にとって日常生活の向上の効果があると言え、これまでのコース制を廃止し全学生に福祉と農業を学べるようにカリキュラムを変更した。 2　授業構想の確認。 (1)1年次　農福連携演習Ⅰ　通年　30回（農福連携の概要と体験[農業と福祉]） 2年次　農福連携演習Ⅱ　前期　15回（野菜、草花、加工等農業体験[手順書作成]） 3年次　農福連携演習Ⅲ　後期　15回（農福連携コーディネーター） (2)農福連携演習Ⅰ　令和8年度から開講 農業を通してクライエントを取り巻くミクロ・メゾ・マクロレベルでの環境をアセスメントし、介入していく視点・技術を体験的に学ぶ内容とする。 具体的には農福連携を実践している就労支援事業所の見学、施設外就労を受入れている農家の見学、6次化、農福商工連携など （文責：酒井　啓　）	

第３章　今年度の事業及び教育プログラムの内容

第1節　北海道余市紅志高等学校等との連携（令和7年度）

第１項　連携内容

授業テーマ:養護学校生を招いてミニトマトの芽かき作業を行う際の手順書作成

授業回数:合計 14 回（対面実施 10 回、各校実施 4 回）

※（高等学校の科目『地域園芸』2 時間連続授業（100 分）で実施

受講学生:高等学校生 18 名（3 年生）、専門学校生 3 名（3 年生）

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
４月１１日 ①	・オリエンテーション（授業の目的及び目標の確認、農福連携の理解） 講師：北海道余市紅志高等学校　教諭 山本 雄三 先生	余市紅志高等学校	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名
４月１８日 ②	・余市養護学校見学（養護学校及び対象者の理解）	余市養護学校	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名 余市養護学校 教員 1 名
４月２５日 ③	・知的障害の理解（余市養護学校教員の高校への出前授業） 講師：北海道余市養護学校　教諭 髙階 昭寿 先生	余市紅志高等学校 札幌心療福祉専門学校 （オンライン）	
５月　９日 ④	・手順書の作成と細分化の基礎的な理解 講師：札幌心療福祉専門学校　教員 佐藤 誉匡	余市紅志高等学校	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名
５月１６日 ⑤	・余市養護学校生（17 名）とのミニトマトの種まき交流	余市紅志高等学校（農場）	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名 余市養護学校 教員 6 名
７月１８日 ⑥	・手順書の作成、再考、修正	各校	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名

7月２５日 ⑦		余市紅志高等学校	余市紅志高等学校 教員 2 名
８月２９日 ⑧		各校	
9月　5日 ⑨		各校	
9月１２日 ⑩	・手順書の完成、手順書の検証（ミニトマトの芽かき交流）の準備	余市紅志高等学校（農場）	
9月１９日 ⑪	・手順書の検証 → 余市養護学校生（17 名）とのミニトマトの芽かき交流	余市紅志高等学校（農場）	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名 余市養護学校 教員 6 名
9月２６日 ⑫	・余市養護学校生（18 名）とのミニトマトの収穫交流		
１０月１０日 ⑬	・報告書作成（学びの整理）	各校	札幌心療福祉専門学校 教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名
１０月１０日 ⑭	・報告会（学びの発表）	余市紅志高等学校	

手順書の作成



手順書の検証
（ミニトマトの芽かき作業）



余市養護学校との交流会



高等学校生、専門学校生合同の
学びの報告会



第２項　成果

今年度の余市紅志高等学校との連携授業は、高等学校の 3 年生の選択科目である『地域園芸』の科目で実施した。連携授業開始前に高等学校の教員と授業の目的及びスケジューリング等に関し密に連絡を取り合い共有したことにより、特別支障なくスムーズに開始することができた。余市紅志高等学校の参加学生（3年生）は昨年の 11 名から 18 名に増加している。また、本科目の目標を下記の通りに掲げ授業を展開した。

① 本授業に参加した高等学校生および専門学校生の成長

・課題を発見し、解決する力を身に付け向上する。

・各学校生や余市養護学校生との交流、失敗や成功体験を通して、相手に対して自分の考えを分かりやすく伝えるコミュニケーション能力、及び協調性を向上する。

・計画性を高め、いつまでに何をどのような形にしていなければならないのか見通しを持ち、自主的に行動できるようになる。

・地域貢献や「農福連携」を軸とした共生社会の実現を意識し、自分のできることを粘り強く取り組もうとする使命感や責任感を高め、積極的に行動できるようになる。

・「農福連携」の多様性について、自主的に考察できるようになる。

② 本授業に参加した高等学校生が福祉に関心を持ち、本校への入学や専門職を目指す者が現れること。

・専門学校生との直接的な関りにより、高校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深める。

①に関して、手順書作成（ミニトマトの芽かき作業の手順書を作成し、養護学校生を招いて手順書を使用した交流会を実施）をテーマにした連携授業を通して、高等学校生及び専門学校生の成長が十分にうかがえた。特に養護学校生との関わりにおいて、各学生が個々に合わせた関り方と分かりやすく話すことを意識して取り組んだ結果、他者の考え方や価値観を受け入れようとする気持ちや、コミュニケーション能力及び観察力、客観的に自分自身を見る力が向上された。また、養護学校生との交流会を3回実施し、回数を重ねるにつれイベントに向けての計画性や課題解決の意識が高まり、使命感や責任感を持って取り組むことができていた。同時に、障害者の理解が深まったことにより、相手の立場になって多様な角度から物事を考える力が向上され、偏見の除去や地域貢献及び共生社会の実現に関して考えることができるようになった。

②に関して、本校への入学には至らなかったが、高等学校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深め進路選択することができていたように感じる。また、高校生 18 名の内 3 名は地元余市町の福祉施設に就職しており、本授業が福祉職に就こうとする一つのきっかけになったとも考えられる。

全ての授業終了後に高等学校生にアンケートを実施し、下記の意見が伺えた。

【専門学校生との活動を通して感じたこと】

・丁寧に分かりやすく教えてくれることが多く、とても支えになった。アドバイスが参考になった。
・自分にはない視点で観察や考えることができていてさすがだと感じた。
・報告会においてまとめ方が自分とは異なり分かりやすく勉強になった。
・距離感が近く浸し見やすく楽しく過ごすことができた。

【専門学校生との活動を通して身についたこと】

・人には不得意、得意があるため相手に合ったやり方を考える力
・自分の意見をどうやって伝えるかまた、どのように砕いたら相手に伝わりやすいかなどの言語力
・人の観察の仕方と客観的に自分自身を見るという力
・色々な視点で細かく考えることができるようになった

【養護学校生との活動を通して身についたこと】

・コミュニケーション能力（相手に合わせて話をする、相手の話を汲み取り相手に優しく話しかける、聞く力）
・観察力（注意深く見る）
・皆で協力して取り組もうとする姿勢

専門学校生の余市町への移動による疲労が懸念されていたが、オンライン授業の活用や各校で手順書作成を数回行ったことで、出席率が安定し支障なく終えることができた。また、今年度初の取り組みとして高等学校生との本授業の学びを整理した合同報告会を実施したことにより、高校生の良き手本になろうとする意識が感じられ報告の内容や仕方を自主的に工夫、改善する姿勢が伺えた。

教員間においては、高等学校の担当教員と今年度で 3 年目という実績もあり、良好な関係性を保ち共通認識を持って毎回授業を展開したことにより、授業中も臨機応援に対応することができた。余市養護学校を含めた3校連携した授業も今年度で 3 年目となり、年間計画（授業日程の設定や交流会での役割分担など）も年度開始前にスムーズに設定することができたと共に、学生は知的障がい者との直接的な交流から対人スキル及び農作業における福祉的視点を培うことができた。また、今年度は高等学校の担当教諭を 2 名体制にしたことで、交流会に来られない養護学生（比較的重度な知的障がい者）に対して、高等学校生と専門学校生が養護学校に出向き作業体験してもらう機会を設け、本委託事業 2 年目と 3 年目に実施したバリアフリー農園をテーマにした余市紅志高等学校との連携授業で培った知識技術を生かし実践できたことは、学生の新たな学びにもつながったと感じられる。

今年度は年度当初に高等学校生に対して本科目を選択した理由及び進路希望のアンケート調査を実施している。本科目の選択理由として「障害のことをより知りたかった」「農福連携に興味があった」「農業を通して地域の活性化を図りたかった」などの他に「先輩から聞いて気になった」と

の意見が伺えていると共に、余市紅志高等学校の参加学生（3年生）は昨年の 11 名から 18 名に増加したことから、高等学校生間において本授業内容とその成果が浸透され農福連携の興味関心を抱く機会にもなっていると考えられる。また、前述でも述べたが高等学校生 18 名の内 3 名が地元余市町の福祉施設に就職しており、本授業で学んだ知識と技術を生かせる人材になることが期待される。

次年度も、今年度同様に手順書作成（作業の細分化）をテーマに掲げた余市紅志高等学校と余市養護学校との 3 校連携授業を、オンライン授業を併用して実施する運びとなっている。今後は、養護学校生との交流回数やどの作物でどの作業の手順書を作成するかなど、各教員と検討していく予定である。

○掲載記事について①

北　海　道　通　信　令和 7 年 10 月 7 日 【火曜日】

余市紅志高 余市養護等と
農福連携の深化へ
手順書もとにトマト芽かき作業



【小樽発】余市紅志高校（西村博幸校長）は9月中旬、余市養護学校（宮岸尚平校長）および札幌心療福祉専門学校（鎌田一宏校長）との連携授業を実施した。余市紅志高の生徒たちが事前に作成した手順書をもとに、余市養護の生徒がミニトマトの芽かき作業に取り組んだ。

連携授業は、3年度に文部科学省の「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の委託を受けたことから開始したもの。6年度には、授業内容を「作業の細分化、手順書づくり」と決定。農福連携について理解し、手順書作成に関わる知識や技術を身に付け、作業手順を言語化する知識を育成することなどを目的として行っている。

手順書については、余市紅志高の生徒が事前に札幌心療福祉専門学校で作成方法を学び、作成した。

当日は、余市紅志高の農場でミニトマトの芽かき実習を行った。余市紅志高の生徒10人、余市養護の生徒13人が出席。各班に分かれて、余市紅志高の生徒が手順書をもとに芽かきの方法を丁寧に説明したあと、余市養護の生徒が助言を受けずに作業に取り組めるかを検証した＝写真＝。

最後に、手順書の内容や作業の難しさなどについて振り返り「標記を平仮名にする」「言い回しを簡単にする」など改善点を探った。

○掲載記事について②

２０２５年１０月９日（木）　日刊北海協同組合通信　第１８７０２号

農福連携実践に学生や高校生が手順書作成

ミニトマトのわき芽取り作業で実用性検証



実際の作業の様子（札幌心療福祉専門学校提供）

【余市】学校法人西野学園札幌心療福祉専門学校（札幌市）、余市紅志高校、余市養護学校の３校はこのほど、農福連携に関する連携授業を同高校の農場などで実施した。高校生と専門学校の学生が作成した作業手順書を用いながら、養護学校の生徒らが実際の農作業に挑戦。実践的な取り組みを通じ、農業分野における障害者の活躍に向けた新たな可能性を探った。

この連携授業は、文科省の「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の一環として2021年度から行われている。24年度からは、障害を持つ生徒が農業現場で円滑に作業できるよう「作業の細分化」と「手順書づくり」をテーマに設定。今回は、養護学校の生徒が教員の助言なしに作業できるかを検証するため、同高校と同専門学校がミニトマトのわき芽取りに関する作業手順書を作成した。

この日の授業には生徒や学生ら計35人が参加。同校の農場と同養護学校の２カ所で、作業手順書を使いながら同養護学校の生徒らがミニトマトのわき芽取り作業を行った。

作業を終えた同養護学校の生徒からは、手順書について「図が見やすかった」「説明がわかりやすかった」といった意見が聞かれた。一方で「実際にハウスの中でわき芽を探すのに苦労した」との声も挙がり、実践ならではの課題も見つかった。

同専門学校は「生徒たちから出た多くの意見は次回のより良い手順書作成につながるもの。非常に実り多い実習になった」としている。

（日並　雄太）

第２節　札幌圏域の高等学校等との連携（令和7年度）

第1項　連携内容

授業テーマ：農業の栽培から収穫、加工、販売までの流れを体験するとともに、各工程において誰もが力を発揮できる環境を整える視点を養う

授業回数：合計８回（市立札幌大通高等学校は「キャリア探求」の科目として単位認定を行う）

受講学生：市立札幌大通高等学校生 2～4 名、社会人 3～20 名、本専門学校生 1～3 名

実施体制：今年度は本連携授業を「令和7年度　農福連携入門講座」としても位置付け、北海道保健福祉部・農政部との共催という形で実施することとなった。そのことにより、本講座全８回のうち５回以上出席した方には、北海道保健福祉部長・農政部長連名での修了証が発行されることとなり、高校生と専門学校生だけでなく、広く一般の方にも参加者を募ることとなった。北海道が募集にも協力してくれ、多くの一般の方の参加もあった。

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
５月１０日	・オリエンテーション ・演劇ワークショップ	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 北海道演劇財団　演出家１名
６月１４日	・農家の仕事について ・農作業体験（畑作業）	農場	札幌心療福祉専門学校 教員２名 合同会社竹内農園　代表社員　１名
７月５日	・農業のユニバーサル化 ･作業の細分化とマッチング	農場	札幌心療福祉専門学校 教員２名 NPO 法人どりーむ・わーくす　理事長
７月１９日	・野菜の流通について ・マルシェのチラシ作り	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社感動いちば　営業部兼　商品課　課長代理１名 株式会社ネクストリソース代表１名
８月３０日	・利益の出し方と、労働者（障害者等）への工賃の関係について	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社ネクストリソース代表１名

	・商品販売の基礎知識について ・魅力的な売り場づくり（ＰＯＰなど）		
９月２０日 ９月２１日 ※どちらか参加で １回分	・農福マルシェの開催（赤い羽根共同募金ブースも併設）	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社ネクストリソース代表１名 札幌市中央区社会福祉協議会職員２名
１１月２２日	・農福商工連携について ・その一つの事例としてのハーブティー作り	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社アット・ボタニカル代表取締役（ハーブスペシャリスト）１名 シミックホールディングス株式会社　CEO オフィス　生薬事業部　社員１名 合同会社 FSS　代表１名 障がい者就労支援事業所ワークショップようてい　就労支援員１名
１２月６日	・農福の６次化 ・調理実習	札幌医学技術福祉歯科専門学校	札幌心療福祉専門学校　教員２名 合同会社 FSS 代表社員１名 ペルル店長１名

第２項　成果

毎回の授業後、受講者には授業で学んだことについてアンケート及びインタビューを実施した。

アンケートは、授業前と授業後の気持ちを 0～10 段階で次の 4 項目について聞いた。①授業へのワクワク度合い、②福祉についてもっと知りたい度合い、③農業についてもっと知りたい度合い、④将来、福祉や農業の仕事に関わってみたい度合いである。

また、高校生に対しては「自分の将来や仕事のことを考えるきっかけになったか」を同じく 0～10 段階で聞き、専門学生と一般社会人には「高校生らと一緒に授業に取り組むことは学びを深めることに役立ったか」を 0～10 で聞いた。

その他に、1 回目から 8 回目の授業毎にどれだけ自身に役立ったかを測る質問を受講者の属性に関わらず同じく 0～10 で質問をしている。

1 回目は「初めて会う人たちで楽しみながら仲よくなる体験」「言葉だけによらないコミュニケーション」「色々な年齢、立場の人と一緒に一つのものを作ったこと」、2 回目は「農家のお仕事内容や、工夫点などについてのお話を聞いたこと」「皆で農作業体験を行ったこと」「ひとつの作業（今回は農作業）について、皆がやりやすい『改善』を考えたこと」、3 回目は「『マッチング』について話を聞いたこと」「農作業体験を行ったこと」「グループで作業との『マッチング』を考えながら皆で作業したこと」、4 回目は「野菜の流通に関わるお仕事内容や工夫点についてお話を聞いたこと」「チラシを作成したこと」「ひとつの作業（今回はチラシ）について、皆がやりやすい役割分担を考えたこと」、5 回目は「就労支援事業という福祉サービス、福祉業界の話を聞けたこと」「商品販売の基礎知識について聞けたこと」「皆で POP づくりや陳列を行ったこと」、6 回目は「マルシェの準備を協力して行ったこと」「実際にマルシェを実施して、皆で協力して接客をしたこと」「実際にマルシェを開催し、利益がどのくらい出るのかを実感として学んだこと」、7 回目は「農福商工連携の実践例や工夫、課題等の話を聞いたこと」「地域づくりの大切さや工夫点などについて学んだこと」「実際に農福商工連携の一例であるハーブティーづくりを体験したこと」、8 回目は「農福連携の 6 次化の話を聞いたこと」「付加価値について学んだこと」「皆で工夫して調理実習をしたこと」である。

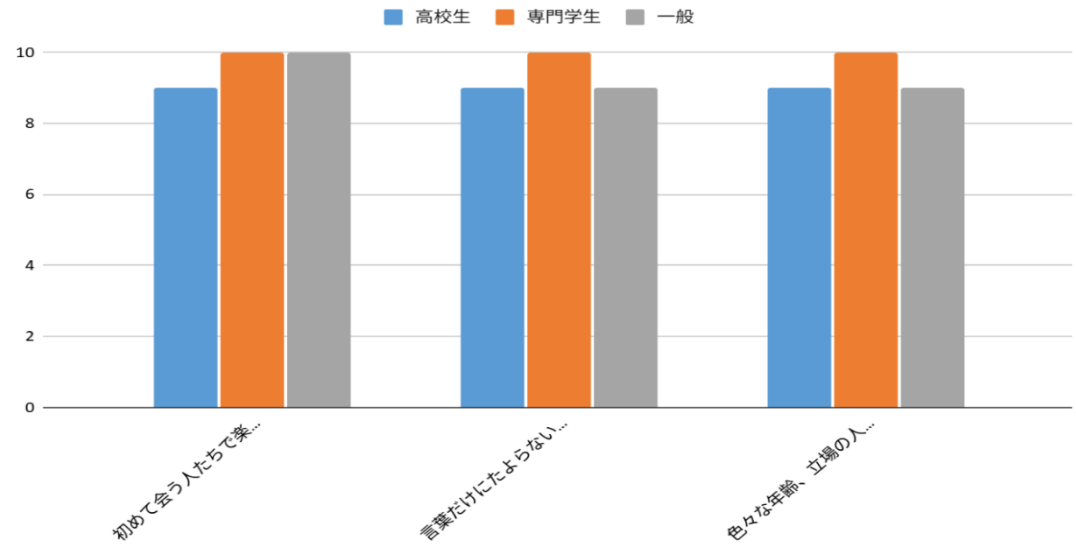
それぞれの結果について、高校生、専門学生、一般社会人の平均値は以下の通りである。

【1 回目】

・「初めて会う人たちで楽しみながら仲よくなる体験」

・「言葉だけによらないコミュニケーション」

・「色々な年齢、立場の人と一緒に一つのものを作ったこと」

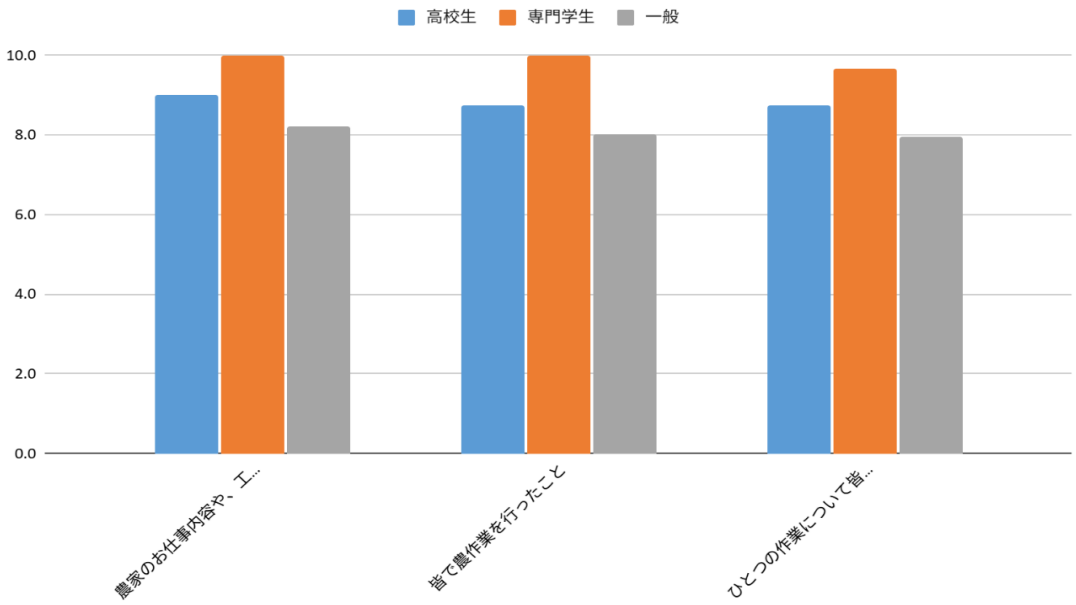


【2 回目】

・「農家のお仕事内容や工夫点についてお話を伺ったこと」

・「皆で農作業を行ったこと」

・「ひとつの作業について皆がやりやすい役割分担を考えたこと」

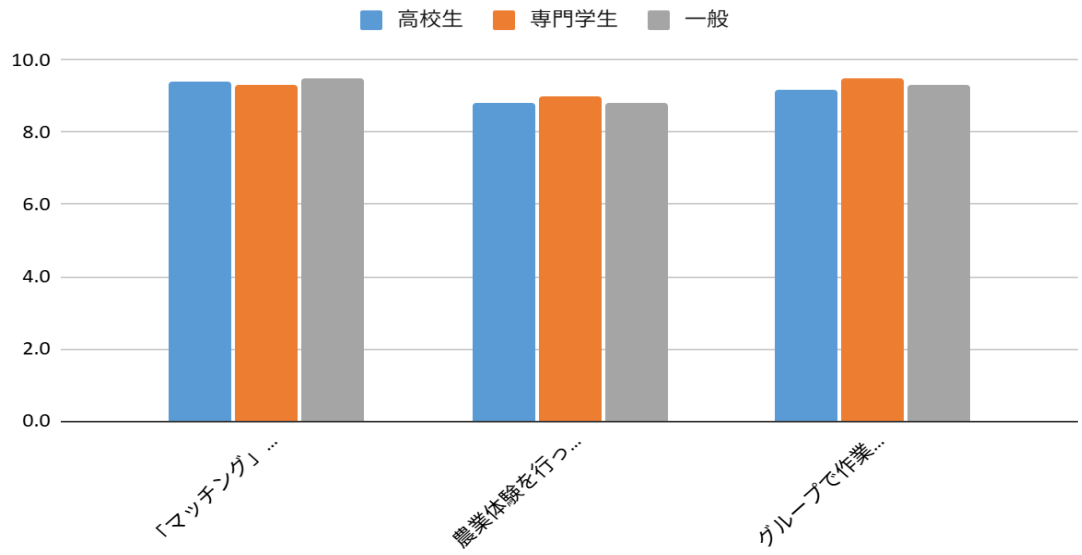


【3 回目】

・「農家のお仕事内容や工夫点についてお話を伺ったこと」

・「皆で農作業を行ったこと」

・「ひとつの作業について皆がやりやすい役割分担を考えたこと」

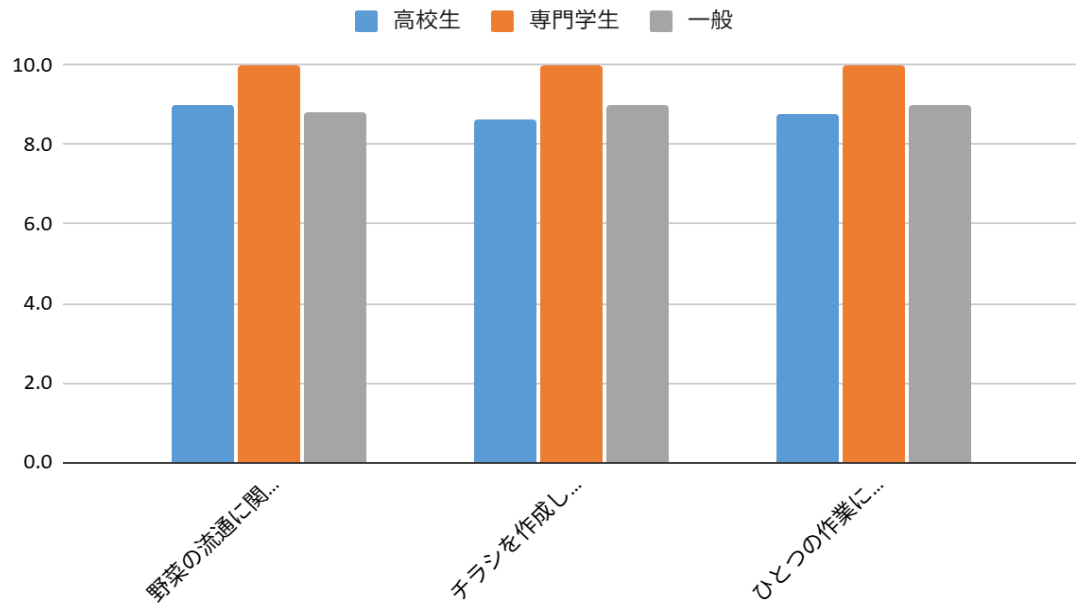


【4 回目】

・「野菜の流通に関わるお仕事内容や工夫点についてお話を聞いたこと」

・「チラシを作成したこと」

・「ひとつの作業に皆がやりやすい役割分担を考えたこと」

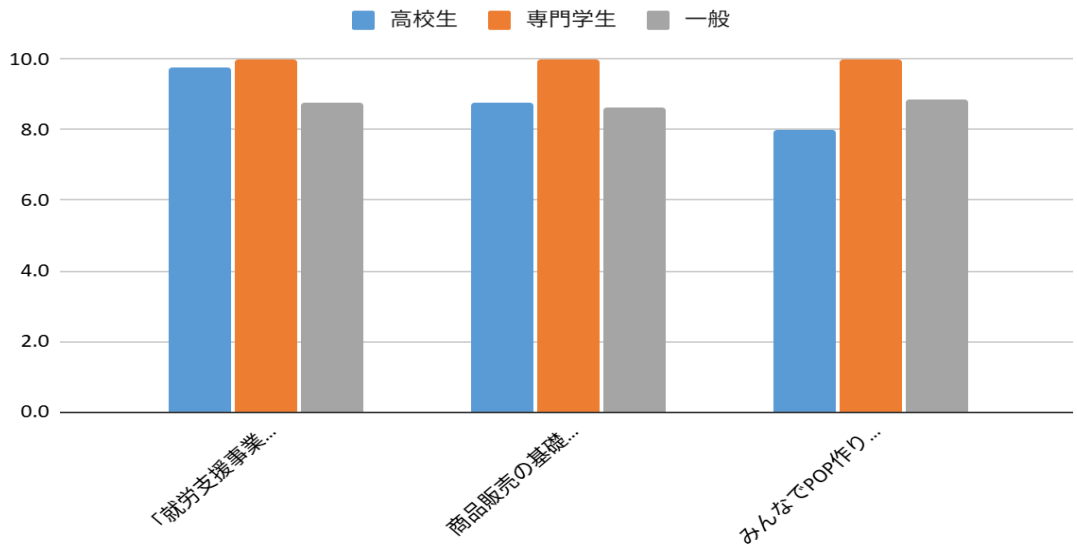


【5 回目】

・「就労支援事業という福祉サービス、福祉業界の話を聞けたこと」

・「商品販売の基礎知識について聞けたこと」

・「皆で POP づくりや陳列を行ったこと」

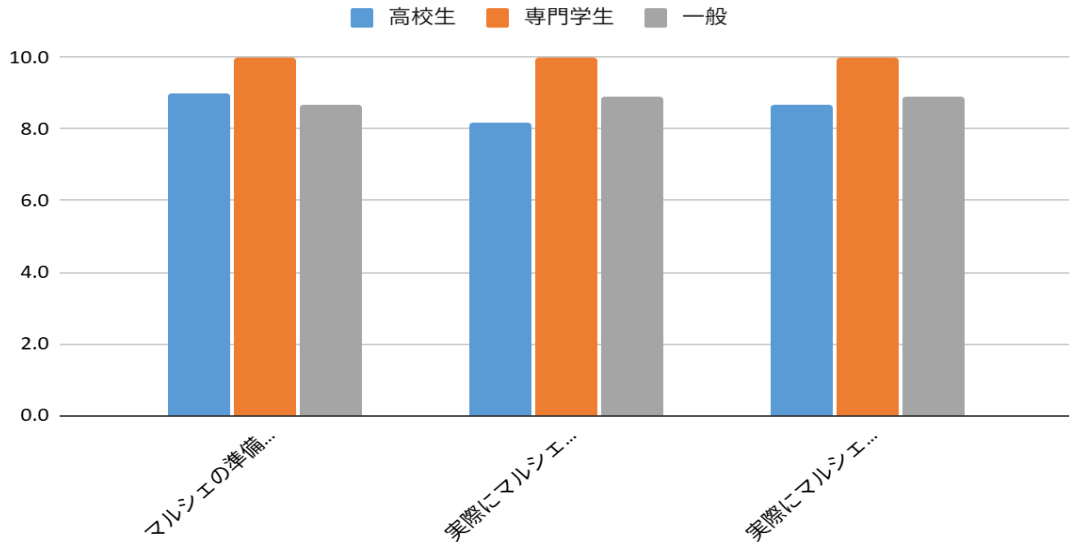


【6 回目】

・「マルシェの準備を協力して行ったこと」

・「実際にマルシェを実施して皆で協力して接客をしたこと」

・「実際にマルシェを開催し利益がどのくらい出るのかを実感として学んだこと」

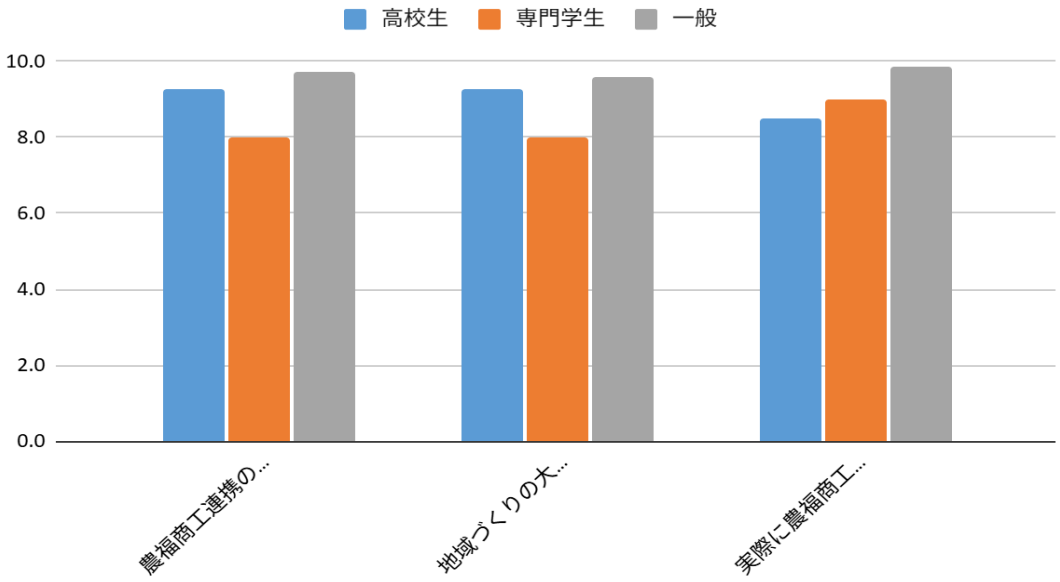


【7 回目】

・「ハーブスペシャリストのお仕事や工夫などについてのお話を聞いたこと」

・「大きい企業のお仕事内容や工夫点などについてお話を聞いたこと」

・「農産物を加工することで仕事の幅、楽しみの幅が広がることの体験」

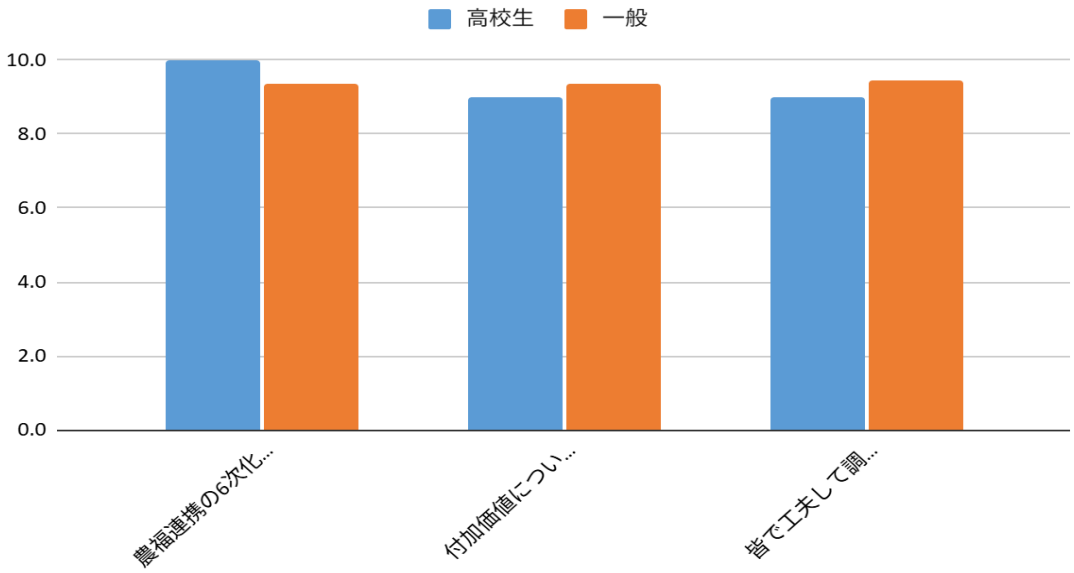


【8 回目】

・「農福の 6 次化のお話を聞いたこと」

・「世代が異なる人達とも一緒に作業したこと」

・「付加価値についてプロの考え方を学んだこと」



インタビューについては、高校生グループ、専門学生グループに分かれ、「本日の授業を受けて、一番楽しかったことは何ですか」「本日、新しく知ったこと、印象に残ったことは何でしたか」「授業の中で自分が一番頑張って取り組んだこと、今日取り組んだ中で、自分が力を発揮できたこと、得意だと感じたことは何でしたか」「他の高校生や大人などと一緒に授業を受ける上で意識したことがあれば教えてください」という質問を基礎として、自由に意見を述べてもらう形をとった。

毎回の授業後にそれぞれのグループに上記内容でインタビューした結果を総合し、そこから見えてきた内容は以下の通りである。

【高校生】

1. 多世代・他者との交流とコミュニケーションの経験を積むことができた
2. 作業の工夫と役割分担への取り組みを学ぶことができた
3. 農福連携と社会・経済への新しい視点を学ぶことができた
4. 反省点と改善のアイデアを出し、今後の成長につなげることができた

以上を総合すると、「多世代との協働や農福連携の実践活動を通じて、実社会のビジネス視点や社会貢献の意義を深く理解し、自律的な思考と他者と協力する姿勢を養う自己成長を得た」という意見が聞かれたと言える。

【専門学生】

1. 実践的なビジネス・マーケティング視点
2. 多世代との協働と団結力の実感
3. 社会的意義と農福連携への理解
4. 改善への意欲と自己評価

以上を総合すると、「多世代との協働や農福連携の実践的な活動を通じ、効率的な作業の工夫やターゲットを意識したビジネス視点を養うとともに、障がい者の工賃や社会の仕組みを学ぶことで、他者と協力して働くことの意義を深く理解する包括的な学びを得た」という意見が聞かれたと言える。

【一般社会人】

社会人参加者は、農福連携についての理解が深まるとともに、人脈および活動の輪が広がっている様子が多く見受けられた。

本講座受講者の中から、北海道が主催する農林水産省認定「農福連携技術支援者」の養成研修を受講する者が複数現れた。

また、受講者が務める就労支援事業所が本講座で講師を務めた農場へ、本講座をきっかけに利用者の施設外就労に行くようになるという事例もあった。

さらには、受講者同士で講座外でも集まるなどしており、「農業」「福祉」や「まちづくり」に興味のある人たちが集まるコミュニティの形成に繋がった。

以上が、本講座の成果である。

第3節　教育プログラムの開発

第１項　実証講座の内容

当初「農福連携の実際Ⅰ」を予定していたが、該当する学生が在籍していないため、「農福連携の実際Ⅱ」の科目において実施する。

福祉事業所と連携した回を記載

第1回　　4月23日（木）　福祉事業所の選定について

福祉事業所の共生舎・ディスポから事業所の概要について説明を受ける。



第2回　　5月7日（水）　共生舎とディスポの事業所訪問



ディスポ



共生舎

第3回　　7月30日（水）　福祉事業所との受け入れのための事前打ち合わせ

オンラインにて共生舎とディスポの担当者と当日の打ち合わせを実施。

第4回　　9月29日（火）　農作業の実践

本校にて土づくりと播種の農作業を実施。

共生舎から利用者2名　職員1名

ディスポから利用者2名　職員2名



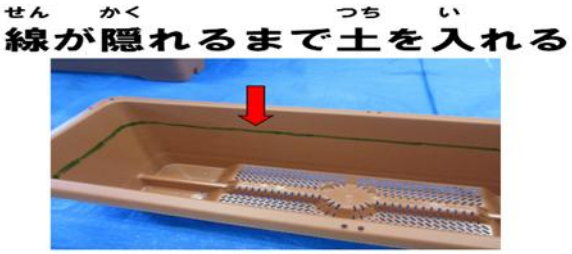
土づくりの様子



播種の様子



手順書①



手順書②

〇意見・感想

・授業内容がそもそも農福連携コーディネーターという概念を学習するというところから、独自性が高く、他の研修ではなかなか学ぶことのできない貴重な機会でした。

・学生が主体的に進めていたところ

・学生が治具を作成していたところ

・手順書の内容に画像をふんだんに使っていたところが良かったです。

・プランターに土を入れる作業の時、「土を線まで入れる」は線が隠れるのか、などところどころ抽象的な指示だったようにも思えます。

〇まとめ

事業計画では2年次の「農福連携の実際Ⅰ」の実証講座を予定していたが、該当する学生が休学となり、開講することができないため、今回、3年次の「農福連携の実際Ⅱ」を実証講座として実施した。

今回、この科目はロールプレイで学生が農福連携コーディネーター役、福祉事業所の職員が福祉施設の役として授業に参加し、教員が農家役として進めてきた。農福連携を実践している福祉事業所の職員からのインタビューやアンケート結果から学生が主体的に進めることができたことや農福連携コーディネーターについて講義だけではなく、実際に学生自身が役割を演じることで農福連携コーディネーターの視点を持って事業所の概要の説明を受けたり、実際に福祉事業所へ訪問、農作業の手順書作成、当日の受け入れなど概ね実践することができた。

第 2 項　オランダ　視察

1　目的

本校は2020年度から農福連携に関する内容をカリキュラムに取り入れている。これまで日本の農福連携の現状がどのようになっているのか京丸園に視察し、理解を深めてきたが、福祉と農業を結び付けて農福連携の取組について日本よりも先駆的に行っているオランダのケアファームからさらに学びを深めることを目的としている。

オランダのケアファームは 20 世紀初頭から存在しており、特に第二次世界大戦後の社会福祉の拡充とともに発展してきた。戦後の復興期には、農村地域の高齢者や障害者のための支援施設として設立され、自然と触れ合うことで心身の健康を促進する目的がある。

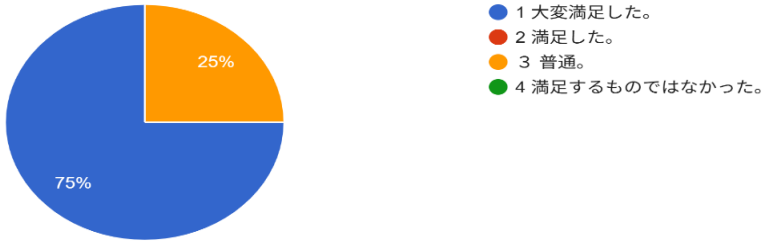
このケアファームは福祉と農業を結びつけることを目的としており、特に障害を持つ人々や高齢者が農業の活動を通じて社会参加できる場を提供し、成果的にも先駆的な取組をしているため、その活動内容を視察し学びを深めるとともに、今後の農福連携の取組に反映していくために視察を実施した。

2　スケジュール・視察内容（3 年 3 名、1 年 1 名　教員 5 名）

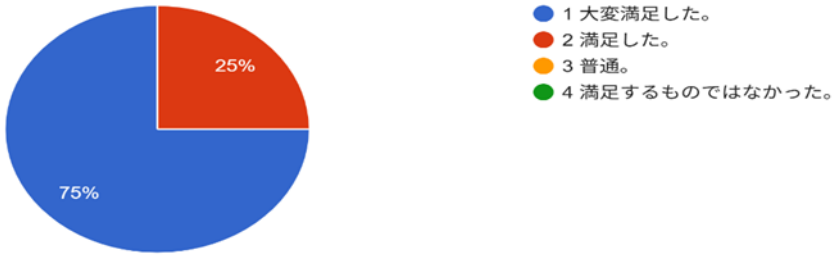
・8 月 5 日（火）　移動日
（千歳空港―関西空港―ヘルシンキ経由―アムステルダム・スキポール空港）
・8 月 6 日（水）　World Horti Center
・8 月 7 日（木）　フークブルックケアファーム
都市農園フード・フォア・グッド（ケアファーム）
・8 月 8 日（金）　オランダ農福連盟
・8 月 9 日（土）　ライガースホーフェ財団（ケアファーム）
・8 月 10 日（日）11日（月）移動日
（アムステルダム・スキポール空港―ヘルシンキ経由―関西空港―千歳空港）

3　アンケートの実施（対象参加学生4名、4 名回収）結果

世界園芸センターの視察について当てはまるものを選んでください。
4 件の回答



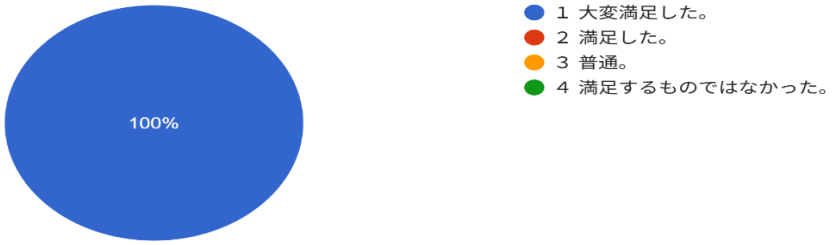
フークブルックケアファームの視察について当てはまるものを選んでください。
4 件の回答



都市農園フード・フォア・グッドの視察について当てはまるものを選んでください。
4 件の回答



農業ケア連盟の視察について当てはまるものを選んでください。
4 件の回答



ライガースホーフェ財団の視察について当てはまるものを選んでください。
4 件の回答



教育施設の視察について当てはまるものを選んでください。
4 件の回答



全体的に視察に関しては、満足したという回答が多かった。

4、 レポート課題の実施、結果（全文 pp.37 を参照）

レポートの学生 4 人から共通している点について

・利用者のニーズを優先していること。

・利用者と対等に関わりアプローチ方法などは日本と変わらないこと。

・オランダの自然を利用した環境の違いの支援について学んだ。

・オランダのケアファームの取組みについて理解した。

5、まとめ

(1)今回の視察から利用者の尊重や利用者に対する関わり方などソーシャルワークの視点について日本と同じであること。そして、ケアファーム(施設内)で農福連携に取り組みや施設には子供から高齢者まで利用していることなど日本とは違う点などを実際にみることで、学生自身が学びをより深めることになった。

(2)ケアファームの視察から取り入れたい点について

〇福祉施設内のプログラムの拡充 (農作業を取り入れたプログラム)

〇子どもから障害者、高齢者まで世代を超えた交流ができる居場所づくり

〇利用者同士の助け合い

【参考資料】

(ミーテイングからワークへ)



（ダイニングルーム）



視察内容の詳細については別添オランダ視察報告書にまとめている。

氏　名	オランダの視察研修を通して、ソーシャルワーカーの大切にするべき視点や価値などについて考えてみてください(150文字以上)。	全体を通して学んだこと、感想も含めて記載してください(150文字以上)。
Aさん	オランダの視察で感じたこととして、考え方が日本の福祉施設と比べ、リスクより先利用者のニーズを特に優先されておりました。やりたいことや施設に入所する前の自宅の雰囲気などその人の為に支援をするという考え方が多くあり、利用者との対等な立ち位置を意識しており、話を聞く側としては考え方がキッパリしていて理想を現実にしている感じがあり勉強になりました。	全体を通し、最初に感じたこととして、施設が日本の福祉施設に比べ全体的に大きいことです。作業内容などは日本の施設とは大きな違いは特にないですが、利用者に対しての考え方であったり、思いといった部分は日本とは異なるとかと感じました。また、自然に囲まれていることや動物が多くおり、人間以外とのコミュニケーションも取れるのはオランダならではないのかと感じさせられました。
Bさん	日本のB型就労支援施設や実習で学んだ様な、個人にフォーカスして支援していくといったことや利用者と対等に関わることなどのアプローチの方法に関しては、オランダでも同じように行っている事が分かったため、より意識して取り組んでいきたいと感じました。オランダではより利用するまでの参入障壁が無いように感じました。幅広い年代や課題を持つ方が参加していて職員、ボランティア、利用者の壁が日本より無いと感じました。自然の中で過ごしたり馬に乗っての言語療法など、広い土地の環境を活かした支援方法があり、利用者にも自由にそれを選べる権利を持っているため、より効果的な支援を行える環境が整っていると感じました。	全体を通して、福祉目線での利用者との関わり方、マインドは通ずるものがあると感じました。支援での違いでは、オランダでの制度による支援のハードル、お金の違いや広大な土地を活かした自然の中での支援といった環境の違いが大きいと感じました。特に制度の面では違いを感じ、よりマクロ視点で考えていくことが必要になると感じました。
Cさん	視察に行った施設は、子供から大人まで様々な年代がいた事に驚きました。一人ひとりの障害に合わせた支援計画を作成していると聞き、それは日本と変わらないと感じました。その人がどんな生活をしたいか、今後どんな活動をしていきたいかなど本人の希望を聞いたり、家族から聞き出したりする事は支援をする為にとても大切なことだと感じました。また、認知症の方々が居るケアファームでは利用者がやりたい事を否定せず、行えることがとてもいい事だと思いました。認知症の方が1人で施設外に散歩に行くことがあるという事を聞いた時は驚きました。日本ではあり得ない事だけど、利用者本人が「～に行きたい」、「～をやりたい」と思う事があるのならばできる限り実践できるように支援して行くことが大切だと思いました。全ての視察を通して大切だと感じたことは、利用者中心に支援計画を立てること、利用者の家族とも良い関係性を作ること、様々な職種と連携して良い支援を行うことだと思います。	視察に行ってとにかく驚く事が多かったです。1つの施設に子供から高齢者まで居ることがまず驚きでした。海外も18歳未満と18歳以上で事業所(施設)が分かれていると思っていました。年齢の差も大きいし、利用者同士仲良くするのは難しいのではないかと思いましたが、作業をしている所を見ると、年齢関係なく利用者同士仲が良く一緒に作業をしていました。障害の特性によっては一人で作業している方もいましたが、多くの利用者は数名ずつ分かれて作業をしていました。利用者同士が仲良く作業をするために支援をする側は、まず利用者一人ひとりの事を理解する事が大切だと感じました。 私の中で1番心に残った施設が認知症の所です。入居している利用者は亡くなるまで居れること。家族や友人が来た時は泊まれる所がある事が驚きました。正直私だったら亡くなるまで一緒に利用と過ごすのはとても辛いと感じてしまいます。でも家族や友人との関わりを切ることなく、生活出来るのはとても良い事だと思いました。帰る前に少し入居者の部屋を見せて頂きました。部屋の壁には家族の写真が貼ってありました。職員さんから最初の説明の時に、写真など貼っていると聞いていましたが実際に写真を見ると少し心が痛くなりました。いつか大切な家族の事も忘れてしまうのだろうかとマイナスな事を考えてしまいました。すぐマイナスな事を考えてしまうのではなく、プラスの事を考えられるようになりたいです。 今回の視察で沢山学ぶことができ、とても良い経験になりました。
Dさん	個人を尊重し、クライエントが楽しいと思える事を探したり自分らしくいられる場所、環境を作ることが大切だと考える。どの農場も個人別にニーズを捉え、意思を尊重したケアを行っていた。否定的な考え方は持たず、クライエントのもといた環境を知り、その生活に近づけるために様々な工夫をしていた。ソーシャルワーカーはクライエントを色々な視点から見て知り、関わっていくことが大切だと視察研修を通して感じた	クライエントの笑顔や日々の様子、ポジティブな反応からやりがいを感じると聞き、国は違くてもソーシャルワーカーをしていて感じるやりがいや喜びは私たちと同じだと改めて感じることができた。ケアファームが当たり前にあるオランダのような環境を日本でも作りたいと思った。ボランティア活動をしている人も多く、利用者がたくさんの人と関わることができるし、ボランティアに参加する人も施設を利用している方たちについて理解を深めることが出来ると思うのでボランティア活動が活発に行われているのはとても良いと思った。クライエントの意思を尊重する点では、外に出たいと言ったら出ることが出来ると聞いてびっくりした。施設側の余裕がある事が分かった。働きやすい環境が整っていて、みんなモチベーションが高く、それが余裕のあるケアなどに繋がるのだと感じた。

第3項　成果

オランダの農福連携の取組みの視察からこれまで余市紅志高等学校連携授業、札幌圏域連携授業で実施した内容が福祉と農業を結び付けることは利用者にとって良い効果があることと共生社会の実現につながることを確信した。その結果、下記の4点について成果として報告する。

①「障害児、高齢者の各通所施設が同じ敷地に開設」の準備

子どもと高齢者が世代を超えた交流できる居場所づくりを確保し、利用者同士の相互作用や助け合いにより、日常生活の質の向上につなげる。

②「農福連携を実践する福祉施設の新規開拓や拡充」

福祉施設内で農業を取り入れる効果について報告し農福連携の推奨の発信を実施した。
農福連携を実践する福祉施設の新規開拓や拡充につなげる。

③「体験学習の教材づくり」

1年を通じて農作業が行える場所の開拓のため、施設内で栽培ができるLED栽培を次年度に企業と連携し実施予定。

④「令和8年度入学生からコース制の廃止、全学生に福祉と農業を学べるように拡充を図る」

日本の農福連携の取り組みは利用者を労働力として農業法人と連携し農作業を行うことが中心となっている。利用者は農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会活動に参加できるように促す取組である。また、農業者は労働力不足につながり双方にメリットのある取組である。

オランダのケアファームは、利用者が農作業を行ったり、動物の世話をしたりすることで、心身の健康を促進し、コミュニティとのつながりを深めることができる。また、農業の環境での活動は、リハビリテーションやスキルの向上にも役立っている。このように、ケアファームは農業の利点を活かしながら、社会的な支援を行う重要な役割を果たしていると言える。

オランダの農福連携の取組みの視察からこれまで余市紅志高等学校連携授業、札幌圏域連携授業で実施した内容が福祉と農業を結び付けることは利用者にとって良い効果があることと共生社会の実現につながることを確信した。そのため、日本でも施設内において農業を取り入れることは利用者にとって日常生活の向上の効果があると言え、これまでのコース制を廃止し全学生に福祉と農業を学べるようにカリキュラムを変更した。

第４章　　全体の振り返り　時系列に記載

今年度、日経 BP の会議など取り組みにつきまして、時系列に報告する。

・6月12日（土）13日（日）　花フェスタ2025　札幌

余市紅志高校との連携授業で取り組んできたバリアフリー農園について一般の方々に周知するため2日間、学生とともに参加した。

○掲載記事について

2025年（令和7年）6月27日（金）　13版　北海道　20
毎　日　新　聞

暮らし、社会に彩りを

花フェスタで展示されている高校生によるガーデニング



29日まで　札幌・大通公園で「花フェスタ」

道内の農業高校生が手がけたガーデニング作品の展示や業者による生花販売などが行われる「花フェスタ」が、札幌市中央区の大通公園西4～西8で開かれている。29日までの期間中、体験会などさまざまな催しが予定されている。

アジサイやコチョウランなど多彩な花々が会場を彩るほか飲食物の提供もあり、来場者は思い思いの時間を過ごしている。

22日には農業を障害者らの生きがいや社会参画につなげる「農福連携」の展示として、札幌心療福祉専門学校が車椅子から負担なく剪定作業ができるバリアフリー農園体験を実施した。

同校は2022、23年度、余市紅志高（余市町）と連携し、コンテナを重ねたプランター作りや車椅子の人も作業がしやすい農園作りに挑戦。この日は会場にその設備を用意し、少しの配慮で多くの人が農業に参加できることをアピールした。鎌田一宏校長は「農福連携の取り組みが普及してほしい」と期待した。【谷口拓未】

バリアフリー農園体験も



バリアフリー農園体験で車椅子に乗りながら剪定作業をする来場者＝いずれも札幌市中央区で

・6月26日（木） 16:00～17:00 web 会議

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R7 第1回ヒアリング（日経 BP）2025.6.26～議事録

【参加者】

文科省：貝原　齊藤

日経 BP：高橋（健）、高津、岩居、高橋（洋）

心療校：佐藤学科長　飯島　長井

■議事要旨

1）文部科学省担当者からの挨拶

2）令和7年度事業計画についての説明

西野学園より、今年度の事業進捗について説明いただいた。

＜主にお話いただいたこと＞

・今年度も余市紅志高校、札幌圏域の高校との連携を継続し、社会福祉士の認知向上に向けた取り組みを実施する。

・昨年度に続き、北海道農政部からの認定資格と連携して、農福連携講座も開講する。

・農福連携先進事例調査として、8/5～11 オランダ視察を予定。

昨年度より準備、調整を進めてきた。認知症高齢者や障がい者など社会的支援が必要な方を対象にした農福連携の状況を調査する。

視察先：ユトレヒト 3 か所、アムステルダム 2 カ所。農業面のアプローチが中心だが、1 か所教育機関にも訪問する予定。

参加者：教員 5 名、専門学校生 4 名（農福連携ソーシャルワークコース 3 年生 3 名、1 年生 1 名）

＜質疑応答の主な内容＞

●実証授業を受けた高校生の進路

事務局――実証授業を受けた高校の生徒が、ソーシャルワークコースに進学した実績はまだないという認識でよいか。

西野学園――その認識で問題ない。札幌圏域の実証授業を受けた高校生の中で、心理を学ぶことを希望していた生徒が、福祉も学べる学校に関心を持って大学進学を選んだケースはあった。余市紅志高校からも過去 2 名ほど、本校への進学に関心を持っていた生徒がいたが、高校卒業後、そのまま余市の福祉施設で働く生徒が多い。働きながら、資格をとるための経済的援助など受けられるため、就職を選択する生徒が多い。

事務局――福祉分野に関心を持ったという意味では、西野学園に入学しなかったとしても成果の一つとして認識している。

●連携高校の拡大
事務局――余市紅志高校、札幌大通高校などの他に、連携する高校が広がる見込みはあるか。
西野学園――札幌市立の高校に案内したが、なかなか厳しいという反応だった。ただ、札幌圏域の連携授業で入門講座を同時進行で行っており、その講座に農業関係の大学生が参加するといった例は出てきた。

●専門学校の実証授業の位置づけ
事務局――専門学校の実証授業が、農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラムになるという理解でよいか。
西野学園――その認識で相違ない。また、今後このコースが精神保健福祉コースに統合されるとしても、カリキュラムをどのように落とし込むか検証が必要かと考えている。

●高校と専門学校の連携効果
事務局――他の受託団体の取り組みとして、高校生の実証授業に専門学校生が参加する取り組みが増えている。西野学園は初年度より先行して取り組んできたため、専門学校生の巻き込みによってどのような成果が見られたかについて、とりまとめを検討してほしい。高専接続の重要なコンテンツになると考えている。
西野学園――各年度の報告書内では、高校生、専門学校生それぞれの効果について記載しているが、改めて体系的にまとめる。できれば数値化したいという思いはあるが、まずはインタビュー形式等で効果を整理していく。

●海外主張の経費精算
西野学園――手続きに関する書類の準備についての質問。飛行機の搭乗に関する搭乗券に代わる手配はできているが、他に考えられる書類の不備があるか確認したい。既に事業計画書上で見積の明細を提出しているため、事前に必要書類が分かれば、アドバイスがほしい。
文科省――事業計画書時点で提出された内容は確認済み。変更がなければ問題ないが、改めて確認し、現時点で問題になりそうな部分があれば事前に連絡する。

3）今年度の事業スケジュールについて・ご依頼事項
本年度のスケジュール案について説明（詳細は別紙記載）

（以上）

・9月５日（土） ノウフクコンソーシアム西日本 設立総会・シンポジウム 視察

熊本県農福連携協議会と連携して、障がいのある方を含めた、生きづらさを抱えた様々な方々と農業の現場をつなぐ「農福連携」のさらなる発展を目指し、西日本地域の関係者が集結する「ノウフクコンソーシアム西日本」を設立総会の開催することになった。目的は農業の人出不足、障がい者雇用、地域の持続可能性といった社会的課題に対して、農福連携を実践してきた各団体が連携し、知見の共有と連携の深化を図るために設立することになった。

・基調講演　「ノウフクコンソーシアム西日本への期待―地域と人をつなぎ『実践』の力―」
講師　東海大学　教授　濱田　健司氏

・実践事例発表
第一報告　社会医療法人みどり会さんさんグリーン　施設長　新免　修　氏
第二報告　一般社団法人　STEPUP　代表理事　堀川　佳恵　氏
第三報告　NPO法人　たかつき　事業本部長　石神　裕美子氏
第四報告　大隅半島　ノウフクコンソーシアム　事務局長　天野　雄一郎　氏

【基調講演】　東海大学　教授　濱田　健司氏
「ノウフクコンソーシアム西日本への期待―地域と人をつなぎ『実践』の力―」
ノウフクコンソーシアム西日本が目指すものは「難しい」「できない」を「できる」にする。
さまざまな主体による新共同体　福祉関係者、農業関係者、研究者、中間支援組織、教育機関、行政機関など多様な関係者がそれぞれの立場を超えて繋がり、専門性を持ち寄って、農福連携をより一層推進する。つまり、関係する団体・人が主体で地域を超え現場のためにつながること。そして、多様な主体が現場で実践できるようにしていくこと。

【実践事例紹介・シンポジウム】
・社会医療法人みどり会さんさんグリーン　施設長　新免　修　氏
就労継続支援B型事業所として自前で農地を持ち農福連携に取り組んでいる立場での実践報告であった。生産、生産したものを加工品製造・調理そして販売・コミュ二ティカフェの運営を行う「農福連携」を通した6次産業に取り組んでいる。また地域特産にこだわっており、宇治抹茶・京都えびいも・京都田辺茄子・万願寺とうがらし・鷹の爪などを生産している。「農福連携」を通して社会の一員として活躍し、地域で必要とされる存在を目指している。

・一般社団法人　STEPUP　代表理事　堀川　佳恵　氏
就労継続支援A型事業所と自立準備ホーム・共同生活援助（グループホーム）を立ち上げ、これとは別に農業生産法人で CoCoRo ファームを設立し、就労支援A型の利用者がCoCoRoファームで働くという農福連携に取り組んでいる実践報告であった。出来ないことを出来るように。苦手なことに挑戦するという考えではなく得意とすることを伸ばしていくこと。出来たという成功体験を

増やして自信をつけさせていくことを理念としている。

・NPO法人　たかつき　事業本部長　石神　裕美子氏

高齢者のデイサービス（通所介護）での農福連携の取り組みについての実践報告であった。

施設の敷地内に大きな庭があり、そこに花や木、作物などを育てている。ここの施設は園芸療法を活用し利用者が幸せな人生を生きることを理念としている。利用者の生きがいづくりと心身機能維持・向上を目的としている。生きがいづくりは利用者のやりたいこと、役割、大切な人間関係、楽しみがある生活が送れるように対応している。

デイサービスを利用している方の生きがい・居場所・つながりが持てるよう活動している。

・大隅半島　ノウフクコンソーシアム　事務局長　天野　雄一郎　氏

農福連携がつなぐ、人・地域・しごと～大隅半島の事例～

大隅半島ノウフクコンソーシアムを令和3年5月設立し農業サイドの労働力不足、福祉サイドの販売力強化や障がい者の低工賃という課題の解消。また、農福連携を知らない、施設外就労に新たに取り組みたいという事業者に農福連携を知るきっかけ作りやサポートの場を提供し、新たな仲間づくり、大隅地区全体の農業振興を図っている。

まとめ

当初、国の農福連携の考えは農業者の人出不足の課題解決や福祉分野においては障害者の自信や生きがいを創出し、社会参画する取り組みであり、特に障害者の雇用場所の確保・賃金や工賃の向上のために推進してきた。現在はこれにとどまらず、対象者が高齢者・生活困窮者、ひきこもりや出所者も含まれ対象者が拡がってきている。農福連携推進ビジョンの改正により対象者が追加され、これまでの活動が評価されてきたことによるものである。

また、農福連携の取組はこれまで以上に濱田先生が提案している農福連携＋αが求められてきていると感じた。例えば耕作放棄地の活用や6次化により地元野菜に付加価値を付けたり、就労支援継続 B 型事業所がレストランを運営しそのレストランで利用者が栽培し収穫した野菜を活用することやレストランが地域住民の憩いの場所に繋がってくると地域の過疎化の予防や地域福祉の向上に繋がる可能性があると考えられる。

<u>・11月12日（水）web 会議</u>

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R7第 2 回ヒアリング（日経 BP）2025.11.12～議事録

【参加者】

文科省：貝原　齊藤

日経 BP：高橋（健）、高津、高橋（洋）

心療校：佐藤学科長　飯島

■議題

1）文部科学省担当者からの挨拶（文部科学省）

2）令和7年度の進捗状況についての説明（西野学園）

3）今後の事業スケジュール・ご依頼事項（事務局）

■議事要旨

1）文部科学省担当者からの挨拶

2）令和7年度進捗状況についての説明

西野学園より、今年度の事業進捗について説明いただいた。

＜主にお話いただいたこと＞

・余市紅志高校との連携は終了。札幌圏域の連携授業は残り 2 回、来週末と 12 月 6 日で終了となる。その後、北海道農政部、保健福祉部から終了証を発行してもらい終了予定。

・8 月 5 日～11 日にオランダ視察（ユトレヒト、アムステルダム）を実施。障がい者や高齢者が農業活動を通じて社会参加できる場を提供し、先駆的取り組みをしているケアファームの活動内容を視察し、今後の農福連携の取り組みに反映することが目的。参加者は、教員 5 名、専門学校生 4 名。

① 世界園芸センター：施設園芸に関連した研究・教育・起業・政府の 4 機能を持つ。施設内に職業専門学校を運営。職業訓練校として位置づけられており、学生数 1200 名ほど。カリキュラム内に農福連携は含まれていないが、ケアファームに農業をとりいれているところが増えており、今後含める可能性はある。

② フークブルックケアファーム：子どもから高齢者まで幅広い年齢層の知的障がい者、身体障がい者、精神障がい者を対象とし、ケアと日中の自律的な活動を提供。世代間の交流がある。農作物の生産はないが、利用者のプログラムに農作業を取りいれている。

③ 都市農園フード・フォア・グッド：農業を専門にしている職員はいないが、農業経験があるボランティアがおり、技術、知識を情報共有。手順書はなく、利用者と対等な関係で共に作業を行う。

④ オランダ農福連盟：15 の地域組織を通じて 900 以上のケアファームが参加。ケアファームの品質維持を図り、国の政策の情報提供を行い支援。

⑤ ライガースホーフェ財団：認知症居住型ケアファーム。動物の世話、ガーデニングなどで喜びと自尊心を育む。外出支援に力をいれており、利用者の希望に沿って外出できる。

・まとめ：ケアファームは、利用者が農作業や動物の世話をすることで、心身の健康推進、地域コミュニティとのつながりを深める働きをしている。農業活動は、利用者のスキル向上、リハビリに役立っていると理解できた。職員は社会福祉、心理学だけでなく障がい者支援、農業の知識が求められており、有資格者が少なくても 1 名は在籍。オランダにおいても、資格専門職の配置は重視されている。農福連携に関する教育プログラムはないが、農業、福祉に関する教育プログラムが中等職業教育の中で位置づけられており、農業課程の学生がケアファームにおける農業と福祉の

関係を学び、福祉課程の学生は福祉に農業を取り入れる意義を学んでいる。
・日本とオランダの違い：社会制度が大きく異なるほか、農業と福祉の結びつきはオランダは早くから進んでいる。
・全体のまとめ：オランダのケアファームでは農福連携を実践し、利用者によい効果をもたらしてる。日本の施設内でも同様の効果をもたらす方策と期待できる。また、日本では過疎地域での高齢化が進み、サービス提供体制の見直しが求められているが、オランダの年齢・障害の程度に関係なくサービスを提供する体制は参考になると思われる。

＜質疑応答の主な内容＞
●農福連携の位置づけ
事務局――オランダのケアファームは、農作業を通じて障がい者をケアするという治療に重心があるが、日本の農福連携は、障がい者の社会参加、農業の労働力確保に重きをおいており、意識の違いがあると感じたがいかがか。
西野学園――日本において、人手不足から障がい者が作業にはいる面はある。視察先は、施設内に生産しているところがなかったが、生産しているケアファームであれば違った取り組みがみえたかもしれない。
事務局――高専接続のプログラムにはどちらを折り込むのか。
西野学園――日本は障がいの分野ごとにサービスを提供しているが、オランダはすべての対象者を支援していくため、そのまま取り入れるのは難しく、検討に時間をかけたい。
事務局――農業、福祉を共に教育することで双方の知見を持った人材が増えれば、農福連携が進むというシナリオはあるだろう。

●プログラム対象者の拡大とモデル構築
事務局――日本の制度面で障がいの程度や年齢を超えるのは難しくても、教育は世代を超えて行えるのではないか。教育プログラムの対象者の年齢層を拡げれば、世代間交流も可能になる。農業と福祉の知識を持ち、農業を支える労働力となる人材のケアができる指導者の育成に取り組んでいると認識しているが、開発モデルはどのようなものを想定しているか。
西野学園――余市で行った、高齢者施設でバリアフリー農園を通じて農業体験をしてもらった授業は、今回のケアファームに近いと感じた。札幌圏域の授業は、すでに農福連携を年齢関係なく学べる仕組みになっており、小 3 から年配者まで参加している。そこをどう整理するかが課題と考える。
事務局――余市と札幌圏域の取り組みをミックスさせたもの、プログラムに施設のあり方を抱き合わせたモデルを構築できるとよい。
西野学園――これまで、生産性のあるところに人材を送り出すことに重きをおいていたところはある。視察をして、施設内で農業をするといった視点が今後必要になると思った。

●実証授業の検証について
文科省――実証授業のアンケートとりまとめ、効果検証はこれからか。
西野学園――札幌圏域は毎回アンケートをとっている。余市紅志高校は、対象となる 3 年生に、授業開始前に進路希望をインタビュー調査し、授業後に再度確認してまとめる予定。最後の合同報告会では、生徒たちの学びや興味関心に関する意見を直接得ている。

3)今後の事業スケジュールについて・ご依頼事項
＜事務局＞合同会議、オンラインセミナーについて
・合同会議:令和 9 年度以降の取り組みをテーマとしたい。
・セミナー:西野学園は、1 月 16 日 16 時 10 分から登壇をお願いしたい。登壇時間は 15 分程度、発表後に有識者からコメントをもらう流れ。接続テストを 14 時頃にお願いする予定。

（以上）

・12月5日(金)web 会議
令和 7 年度文部科学省高専接続・分野横断連絡調整会議
第 2 回合同会議＜3＞

■開催日時:2025 年 12 月 5 日(金) 15:00～17:00

■参加者(敬称略)
＜受託団体＞
一般社団法人 沖縄専門人材開発研究会:舟本怜士郎
学校法人小山学園 専門学校 東京工科自動車大学校:影山裕介、和泉明日香、都留菜々子
一般社団法人日本 e スポーツ学会:筧誠一郎
学校法人西野学園 札幌心療福祉専門学校:佐藤誉匡、飯島英幸
学校法人智帆学園 専門学校琉球リハビリテーション学院:福田聡史
株式会社東京リーガルマインド:平原俊和、篠原、若林
学校法人日本航空学園 日本航空大学校 北海道:山本浩、川村賢一
※公益社団法人 福岡県歯科医師会立福岡歯科衛生専門学校はオブザーバーとして参加いただいた。

＜有識者会議＞
専修大学商学部教授:渡邊隆彦
学校法人川島学園 鹿児島実業高等学校:上門大介
地域・教育魅力化プラットフォーム コンソーシアム事業マネージャー:廣田拓也

＜文部科学省＞
貝原、齊藤
＜事務局（日経 BP）＞
高橋（健）、高津、高橋（洋）
（高橋（健）、高津は兼有識者会議構成員）

■議題

1．文部科学省担当者からの挨拶
2．「令和 9 年度以降の持続可能性に向けた取り組みについて」（意見交換）
1）事業期間終了後を見据えた体制・資源・運営面での工夫点、検討してみたいポイント
2）本事業の成果指標・評価方法についての工夫案や試してみたい考え方
3）企業や行政との連携の現状、感じているハードルや乗り越え方のアイデア
①受託団体より情報共有
②有識者会議からの質問と意見

■議事要旨

1．文部科学省担当者からの挨拶
会議の趣旨および進行について説明後、文部科学省担当者からの挨拶が行われた。

2．「令和 9 年度以降の持続可能性に向けた取り組みについて」（意見交換）
①受託団体の発表
参加団体より、令和 9 年度以降の持続可能性に向けた取り組みについて発表がされた。

主なポイントは以下。

① 受託団体の発表
● 事業終了後（令和 9 年度以降）の体制づくり・持続性確保
多くの団体が、継続体制の確立を課題として認識。
・既存連携（例：探究授業・専門技能授業）を継続しつつ、高校の数が急増しているため、教員のマンパワー確保・仕組み化（オンライン化等）の必要性が明確に。
探究・DX・実習型の講座を扱う団体では、プログラム更新と専門性維持の負荷が課題。
トレンド変化（DX 等）に対応するため、情報収集と内容刷新が不可欠。

● 高校との連携深化と教材の自走化
いくつかの団体では、開発した教材の高校内運用を可能にする移管を開始。
連携授業の一部を高校教員が担える形に改良し、自走化と負担軽減を図っている。

普通科・総合学科を対象とする団体では、進路指導・キャリア形成支援として
専門学校の教育内容を高校生活の中へ取り込むモデルが進展。

● 企業・行政との連携状況と課題

多くの業界で人材不足が深刻なため、企業側は連携に前向きで、インターンシップ・講師派遣など協力が安定。

しかし業界によって濃淡があり、特に IT 分野は企業側の多忙から協力が得にくい点が課題。

行政（県・市）の巻き込みは「委員としての参加」に留まるケースが多く、事業終了後の支援・制度化にはさらなる関与が必要。

● 全国展開・地域展開に向けた検討

各団体が、自地域で得た成功モデルを他地域へ広げる必要性を認識する一方、
産業構造・行政特性が地域で異なるため、画一的展開は困難という認識も共有。
一部では、高校間・企業間をつないだ「横串の交流プログラム」の構想も進む。

② 有識者会議からの意見

● 成功・失敗の整理と“事業知”の蓄積が必要

5 年間の取り組みには多様な成果と課題が存在し、うまくいった点／いかなかった点を分けて整理するフェーズに入っている。

受託団体どうしが悩みやノウハウを共有できる、深い議論の場を作るべきと提案。

● 横展開の鍵は「高校教員の意識変容」

多くの高校教員が、連携授業を通じて「高校の授業だけでは補えない価値がある」
と実感するケースが増えている。この“気づき”を継続して積み上げ、高校側が自発的に導入したいと思う状態を作ることが持続性を左右する。

● 行政連携の不足と“危機感の共有”の必要性

行政に対しては、専門学校側から、業界の人手不足や教育課題に対する危機感を明確に伝え、動かすための働きかけが必要。専門学校が単独で抱えてきた職業教育を地域全体の課題として提示する必要がある。

● 産業界（企業）の“Tier1 企業”との連携が鍵

DX 推進に積極的で若者育成に前向きな Tier1 企業と連携することで、進路選択の価値や学習の意義を若者へ提示しやすい。卒業生へのヒアリング等から、良質な企業の情報を蓄積し、カリキュラム改善と企業連携の質向上につなげるべきと助言。

● 事業の成果指標（KPI）に“生徒・教員・地域の変化”を盛り込む重要性

「受講者数」「満足度」だけでは不十分で、高校教員の意識変化、生徒の進路選択の変化、地域産業への理解・定着を測る工夫が必要と指摘。

③ 質疑応答

● 行政連携の“形骸化”問題と、継続的な会議体の必要性

行政は委員会に参加しても、事業が終わると関わりが薄くなることが懸念され、
事業終了後も継続運営できる会議体の設計が必要との指摘。

● 企業の人材不足と協力関係の強化

どの業界も人手不足が深刻であり、企業側が連携の意義を理解してきている。
→ 協力は得やすい環境になりつつある一方、分野ごとの差は依然大きい。

● 専門学校の負担増を避ける設計が不可欠

カリキュラム更新・調整・授業実施の大半を専門学校が担う現状は持続困難。
→ 高校教員の役割拡大や行政の支援を求める声が多数。

● 高校生・保護者への啓発も必要

進路選択では保護者の影響が強く、専門学校の役割・価値を家庭へ伝える広報の重要性が指摘された。

（以上）

・1月16日（金） 16:00-17:45 web セミナー

テーマ:「専門学校と高校学校を接続し地域中核人材を育成」

主 催: 日経 BP

地域活性化のための農福連携人材育成事業の趣旨・目的と実際に取り組んでいる高等学校等と専門学校の連携授業について発表する。

・2月7日（土） 10:00～11:00

「農福連携入門講座修了証 授与式」

場 所 札幌心療福祉専門学校

共 催:北海道農政部・北海道保健福祉部・学校法人西野学園

参加者:修了者18名のうち13名 および オブザーバー3名が参加

令和7年度農福連携入門講座において修了証交付の条件を満たした受講生を対象に修了証を授与する。また、令和7年度農福連携入門講座の振り返りと意見交換会を実施する。

第５章　　まとめ

本年が研究指定の5年目を迎え、年度当初の計画に沿って行われ、おおむね予定通りの内容を実践することができました。また、これまでの継続実践を踏まえ、最終年度に向けた事業内容の見直しや改善に努めることとしました。今年度実践した中のうち3つの事業について、まとめ報告します。

1　余市紅志高等学校、余市高等養護学校と本校の交流事業について

高校、養護学校、本校の3校の学校の特色を活かした交流が深められている事業の一つです。交流事業の大きなカギを握るオープニングは、個々それぞれが緊張を抱えながら自己紹介からスタートします。一人一人が言葉を自分なりに考え表現にまとめ行われます。この体験が事業そのもの成果と考えています。このステップを乗り越えると対話がスムーズになり、傾聴や会話にリズム感ができ深い交流となります。時間の経過とともに笑顔が自然と出る時間に変容していきます。本交流事業教材テーマ「ミニトマトのわき芽取り」に向けて、それぞれの役割に応じて、人との交流やコミュニケーションを行うための準備や発表のための資料作成など、学習効果の高い場面設定となっています。高校生や学生が高等養護の生徒とともに「わき芽取り」を行うための「手順書」の作成した図面は、わかりやすく、相手に理解しやすく、見やすいように工夫されています。本番ではわき芽を手順書の説明を聞きながら、スムーズにわき芽を探すことができたグループや少し戸惑いながら実施できたグループなど様々でした。児童、生徒、学生はこの事業を通して、実習ができるまで待つこと、他人を思う心などが身に付いたように感じられました。

本事業を通して、協働で一つのことを成し遂げる充実感を得ていることが大きな成果です。
今後も継続的な授業が展開できることに大きく期待をしています。

2　農福連携入門講座について

本事業は、4回目の実施となり、高校生、大学生、本校の学生、社会人の方々が参加する異業種、異年齢による一つの集団となって事業を展開している。今年は、参加者の職業はバラエティで弁護士、会社役員、行政機関　OB、事業所関係者、娯楽業、大学生（医学部、農学部）等と幅広な参加となりました。事業の多くはグループ分けで行うことから、年齢差が大きく、高校生から年輩の方々のグループ構成で実践しました。講座内容は農業関係、福祉関係から導入し、生産・加工・流通・販売までのフードシステムの一連の過程を体験するプログラムとなっています。講座の特徴として、コミュニケーション能力や協力、連携が不可欠な内容となっているため、人と人の繋がりが重視され最終的には「農福連携」の目的が達成できるプログラムとなっています。今年の成果は、グループごとに発表や実践が実際的に体験を行うため、大人も高校生も緊張しながら発表を行うことにより、他人の意見を聞く姿勢や質問を発する姿勢などが積極的に行われました。参加された方々は、知識と実践の両方を体験し学ぶことになるため、毎回の終了時には、何かを学び得ている満足感が伺えました。回を重ねる事に、一人一人が農業と福祉の連携の必要性を理解し、多くの方に広めようとしていることに感銘を受けました。また、とにもかくにも、参加者全員が仲良く、生き生きして参加している活動はあまりないのではと感じています。

本事業を通して、交流の輪を広げようとしていることと、人と人との交流を深めようとしている姿が、事業成果であり、継続の必要性と内容の充実を図るプログラム構成の深化が必要です。

3　オランダの農福連携の視察について

オランダの視察先は、主にケアファームを中心に活動を展開して施設等を視察してきました。視察先の多くは、ケアファームとして、日々の生活の中に「農業」（生産・加工・流通・販売）を材料として取り入れながら、心の癒しなどに重点をおいて活動をしています。オランダでは、施設内で異年齢の交流が活発に行われていて、一つの作業をレベルに合わせながら子供から高齢者まで一緒に活動しているのが印象的でした。交流の形態から人を思う心、やさしさ、助け合いなどが養われる成果の大きな活動となっています。また、活動に入る前に、人と人とのコミュニケーションを図

るため、ゆったりしたお茶の時間から挨拶、会話、交流、そして活動へと繋げる取り組みが印象的でした。日本においても、活動のスタートアップに取り上げる必要性があるように強く感じています。全ては開始の状況が安定している中で、活動の始まりとし、質の高い活動を実践するため、安定した心を形成してから取り組むことが重要と感じています。

オランダは生産者との農福連携の活動はあまり多くありませんでしたが、日本においては、少しでも農業労働力の確保と福祉サイドの雇用促進の両立が図れるよう、事業内容の精選を図り、理解者を増やし、実践できる事業所の拡充に努める必要があります。

本事業の視察を通して、労働力と癒しの形成ができる農福連携に努めていきたいと考えています。

おわりに

本事業に関わった高校生、特別支援学校の生徒はじめ、多くの関係者の皆様が「農福連携」の実際的・実践的な体験を通して得た、五感の感動や食の豊かさや心の繋がりを感じ取ったことと思います。特にこれまで取組んできた高校等と専門学校との連携学習プログラムの開発・実証が今後もスムーズに形成されるよう、努力を重ねて参ります。また、社会との接続を図るため、企業や行政機関の連携が一層必要と考えています。

【添付資料】

オランダの視察研修のアンケート（学生）

フォームの説明

世界園芸センターの視察について当てはまるものを選んでください。 *

- 1 大変満足した。
- 2 満足した。
- 3 普通。
- 4 満足するものではなかった。

フークブルックケアファームの視察について当てはまるものを選んでください。 *

- 1 大変満足した。
- 2 満足した。
- 3 普通。
- 4 満足するものではなかった。

都市農園フード・フォア・グッドの視察について当てはまるものを選んでください。 *

- 1 大変満足した。
- 2 満足した。
- 3 普通。
- 4 満足するものではなかった。

農業ケア連盟の視察について当てはまるものを選んでください。

- ○ 1 大変満足した。
- ○ 2 満足した。
- ○ 3 普通。
- ○ 4 満足するものではなかった。

ライガースホーフェ財団の視察について当てはまるものを選んでください。 *

- ○ 1 大変満足した。
- ○ 2 満足した。
- ○ 3 普通。
- ○ 4 満足するものではなかった。

教育施設の視察について当てはまるものを選んでください。

- ○ 1大変満足した。
- ○ 2満足した。
- ○ 3普通。
- ○ 4満足するものではなかった。

オランダの視察研修を通して、ソーシャルワーカーの大切にするべき視点や価値などについて考えてみてください（１５０文字以上)。 *

長文回答

全体を通して学んだこと、感想も含めて記載してください（１５０文字以上)。 *

長文回答

令和７年度文部科学省委託事業　専修学校による地域産業中核的人材養成事業
専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証
地域活性化のための農福連携人材育成事業

令和７年度　成果報告書

令和 8 年 3 月 1 日

学校法人西野学園（札幌心療福祉専門学校）
〒064-0822　北海道札幌市中央区北 2 条 20 丁目 2-28
TEL:011-643-8241　　FAX:011-643-8292